

## 成蹊大学図書館蔵貴重書 解説目録

(5) 『プルタルコス全集』初版本 (1572 年 H. Stephanus 刊行) 補遺  
— British Library における Plutarchus 初期刊本の調査

細 井 敦 子  
平 田 眞 館  
成 蹊 大 学 図 書 館

『成蹊大学文学部紀要 第 58 号 (2023.3)』(p.99-116) に、「成蹊大学図書館蔵貴重書 解説目録 (4) Pierre Petitmengin 氏からの寄贈書：『プルタルコス全集』初版本 (1572 年 H. ステファヌス 刊行)」として掲載したレポート<sup>1</sup>には、報告者の推定にとどまる未確認事項が残されていた。今回、その筆者の一人 (細井) が 2023 年 10 月 10 日から 17 日までロンドンに滞在する機会を得て、大英図書館 British Library, London (以下 BL と略記) の Rare Books & Music 部門において Plutarchus 作品集の 16 世紀刊本のうち 8 点を閲覧し、「目録 (4)」の段階で未確認・推定であった事項等を調べることができた。その確認と前稿での記述の誤りの訂正とをふくめて、British Library での閲覧の報告をする。

## I. 調査の目的：

今回のロンドン滞在は期間が短いため、調査の目的を次の 3 項目に限定し、閲覧の対象を予め BL のオンライン・カタログによって選んで、調査を行なった<sup>2</sup>。1) 成蹊大学図書館蔵本 Plutarchus 全集 (請求記号：880/P75/1～6) すなわち Henricus Stephanus (= Henri II Estienne, 1528/31～98) による 1572 年刊行のギリシャ語原文 6 巻<sup>3</sup>において、テキスト本文の小口側欄外に数頁おきの間隔で小さく印字されている多数の「欄外数字」が何を意味するかについて、先行刊本、すなわちヴェネツィアで刊行されたアルドゥス版 (以下 Ald. 版と略記) の『小品集』

1 以下、「目録 (4)」と略記して当該ページを示す。

2 筆者の帰国後、2023 年 10 月 30 日付で BL から「メイリングリスト」宛で届いた「停電」の通知と 11 月 22 日付及び同月 29 日付の続報によれば、「2023 年 10 月 28 日に、BL がサイバー攻撃を受けたことが判明。オンライン機能の大半はアクセス不可能となった。現在システム復旧の作業中」とのことで、利用者情報の流出もおこっているようである。蔵書史資料の概算総点数が < 170 Million items > (BL 発行広報パンフレット *The Activity Trail* [p.1]) という、この巨大図書館のオンライン・システムが一日も早く完全復旧するようお願いしている。

3 刊行当初は、「全集」としてギリシャ語原文 6 巻に続いてラテン語訳 6 巻および付録 1 巻 (計 13 巻同刊記) があつたとされるが、ラテン語訳と『付録』は、本学図書館では所蔵していない。ジュネーヴ図書館の目録 (Bibliothèque de Genève, GLN 15-16 Plutarchus) によれば、そこに挙げられた欧米十数カ国の 50 近い主要図書館でも、この刊記の『プルタルコス全集』全 13 巻すべてを所蔵している館はごく少数で、とくに第 13 巻『付録』の希少性が目立っている。

(1509年初版本) および『列伝』(1519年)との関係を調べて、「目録(4)」(p.106～110)での推定を検証すること、2) 1572年刊のステファヌス版(以下 Steph. 版と略記)全集のうち刊行当初から希少であったといわれる<sup>4</sup>第13巻 *Appendix* を実見してその概略を知ること。そして、3) 近代のプルタルコス校訂版の規範となった、1599年にフランクフルトで刊行された全集(「目録(4)」p.104～105)を実見すること、の3項目である。

## II. 閲覧した刊本：

上記の目的で閲覧した Plutarchus 作品集の16世紀刊本(題名はギリシャ語ラテン語併記であるが、ここでは略記)は刊行年順に次の8点である<sup>5</sup>：

- 1) *Plutarchi Opuscula LXXXII*. Venetiis: in ædibus Aldi et Andreæ Asulani Soceri, mense Martio M.D.IX.<sup>6</sup> : 『Opuscula [小品集/モラリア』のみの初版本 (BL: Shelf mark: 686. i. 3 および 686. i. 4) . — 2点閲覧。
- 2) *Plutarchi quæ vocantur Parallela*, [Venetiis: in ædibus Aldi et Andreæ Soceri, 1519] : 『Parallelæ [[列伝/英雄伝]] (Shelf mark: 686. i. 2) . — 1点閲覧。
- 3) *Plutarchi Chæronensis quæ extant opera* [Genève] H.Stephanus, Anno M.D.LXXII : 『小品集 [Tom.1]] (Shelf mark: 686. b. 1)、『列伝 [Tom.4]] (686. b. 4)、『Appendix [付録] [Tom.13]] (686. b. 13) . — 3点閲覧<sup>7</sup>。
- 4) *Plutarchi Chæronensis quæ extant omnia, cum Latina interpretatione Hermanni Cruserij: Gulielmi Xylandri, et Doctorum Virorum Notis et Libellis Variantium Lectionum ex Mss.Codd. diligenter collectarum, et Indicibus Accuratis. Francofurti, Apud Andreæ Wecheli heredes. Claudium Marnium, & Ioannem Aubrium. M. D. XC IX.*  
[第I巻] *Tomus Primus, continens Vitas Parallelas, Græcè & Latinè.*  
[第II巻] *Tomus Secundus, continens Moralia, Gulielmo Xylandro interprete.* (Shelf mark 1487. y. 4) . — 2点閲覧<sup>8</sup>。

なお、以下の記述に先立って、手動式印刷機時代の刊本を見るさいの基本的な心得を、今回の調

4 「目録(4)」p.104.

5 各図書の請求記号 (Shelf mark) は Web サイトの <Explore the British Library> — <Main catalogue> — <Advanced Search> などに依拠して調べた。

6 創業者 Aldo Manuzio (ca.1450～1515) の没後、印刷所は義父 Andrea d'Asola に引継がれた。ただしアルドはすでに1506年以来、義父との「共同経営」を指す刊記も使用しており、ここはその1例である(雪嶋宏一『アルド・マヌーツィオとルネサンス文芸復興』東京製本倶楽部会報編集室2014年p.83)。

7 上記ジュネーヴの図書館の Web サイト (<http://dx.doi.org/10.3931/e-rara-6258>) で、同館蔵のこの刊記本第1巻 (*Opuscula* 『小品集』) の画像がみられる。

8 閲覧した2点(第I巻と第II巻)は、同一形式で装訂され、表紙にそれぞれ I, II が印刷されているが、Shelf mark は2点同一。

査のなかで一度ならず思いおこしたことも記しておきたい。それは「同一刊記（同一の印刷・出版事項）の本であっても、内容は必ずしも同一とはいえない」ということで、印刷所に複数台の印刷機があって同一作品を印刷していた可能性や、校正作業が（それぞれの）印刷機の傍で、印刷と校正とがいわば同時進行的に、しかも（「1冊」の本全体ではなく）「1折丁」ごとに行われ、さらに刷り上がった紙が製本されずに折丁を重ねただけの形で出荷された状況なども考慮するからである<sup>9</sup>。

### Ⅲ. 欄外数字について

調査報告の最初に、本学図書館蔵本『プルタルコス』（H. Stephanus 1572年版のギリシャ語原文 6巻、請求記号：880/P75/1～6）についての「書誌面にみる問題点」（「目録（4）」p.105～110）<sup>10</sup>の中で、まづ6巻すべてに共通する「欄外数字」の問題をとりあげたい。

Stephanus 1572年版の『小品集（＝モラリア）』3巻と『列伝（＝英雄伝）』3巻では、いずれの巻でも、ギリシャ語本文の小口側欄外に、小さく印字された算用数字をもつ頁が、巻初から巻末まで、数頁の間隔をおいて出てくる。前回の報告では、これらの数字は何を示しているのかという疑問をもって全6巻について欄外数字の並び方を調べ、それが内容上の各章の配列順序と関わっていること、すなわち欄外数字は、Stephanusが、印刷のためのいわば「原稿」として使用した刊本「元の本」における各章初めの当該頁の頁付数字を、メモとして記したものであろう、と推定した。つまり、章が変わっても欄外数字の配列が連続しているのは「元の本」の配列順に従っていることを示し、章の冒頭かそれに近いところで数字の並び方が非連続になるのはStephanusがその章を「元の本」とは異なる配列順にして印刷したことを示すのであろう、と考えた。そして「元の本」になりうるものは、『列伝』については、Giuntaが刊行した初版本（フィレンツェ、1517年）よりも、改良されて後の諸版の基礎になったとされる<sup>11</sup>Ald.版（ヴェネツィア、1519年）が妥当であろうし、『小品集』については、私たちの欄外数字の調査と推定が、*Plutarque, Œuvres morales*, Tome I, 1<sup>re</sup> Partie (Budé叢書1987年)の第II章：J. Irigoien<Histoire du Texte><sup>12</sup>中の、とくにAld.初版本（1509年）とSteph.版（1572年）との関係についての記述（p.cclxxxvii～ccxcii）に矛盾しないと考え、したがって、Stephanusは『小品集』においてはこのAld.初版本を「元の本」

9 本稿筆者はJ. Irigoien教授のpaléographie grecque（ギリシャ古文書学）の講義で教えられたが、高野彰『増補版 洋書の話』（丸善、平成11年）にも同趣旨の記述がある。

10 書誌面での問題点として、1：Galba, Othoの2項目は『小品集』・『列伝』のいずれに入るか、2：『列伝』第1巻にある乱丁、3：欄外数字は何を示すか、の3点をあげている。

11 Renouard, *Annales de l'imprimerie des Aldes* (Delaware 2003 : repr. of 1834<sup>3</sup>, Paris), p.87.

12 この、ほとんど百頁に及ぶ第II章は、プルタルコス作品（Opuscula『小品集』を中心にして）の古代から中世写本を経て近現代の主な校訂版に至る伝承を扱った論考で< Catalogue de Lamprias >、< Concordance entre les éditions imprimées (depuis celle d'Henri Estienne, 1572)>も付されている。ただし本稿報告者の「目録4」p.109にも記したように、Irigoienのこの論考においては、「Stephanus 1572年版の欄外数字」への言及は全く見られない。同刊記のSteph.本であっても欄外数字を入れていない版が存在することも考えられるが、報告者には未見であり、直接Irigoien先生（1920～2006）に話を伺うことができない現在、その存在は未詳。なおくLampriasのカタログ>は1599年のFrankfurt版（後述）にも掲載あり。

として使いながら、『列伝』と同様、テキスト本文の字句のみならず各章の配列順についても、必要と思われるところで変更を加えたものであろうと推定した。

今回 BL において、上記 1) と 2) の Ald. 版計 3 点の頁付と私たちの「欄外数字」調査の結果とを、とくに各章冒頭に注目して比較検討した結果、上記の推定が誤りでなかったことがわかった<sup>13</sup>。Henricus II Stephanus は、『小品集』と『列伝』のどちらについても各章の配列順の変更を意識して、「元の本」の当該章の始まり（あるいはそれに近接する）頁の算用数字による頁付を、「自分が印刷する本」の欄外にメモとして記録することによって、印刷刊行者自身にとっても、そして「元の本」の刊行者を含む他者にとっても、必要な場合には相互間の参照が可能になるようにしたものであろう（図 3、図 4）。

また、網羅的には記録していないので、ここでは小さな 1 例のみを挙げるが、成蹊大学蔵本 (Steph. 1572 年版) の欄外数字が明らかに単純な誤植である場合、例として『小品集』(Tom. 1, p.212) においては、欄外数字が、104 と 106 の間で「成蹊本：5」(誤)であるのに対して、「同刊記 BL 本：105」(正)となっている。その一方で当然、明白な誤植が両者に共有されている例(同書 p.239 で「120」となるべき欄外数字が両書とも「220」)もある。

同刊記本 2 点の間での違いが本文内容に関わるかと考えられる事例については後述したい。

#### IV. PLVTARCHI OPUSCVLA. LXXXXII.

アルド版『プルタルコス小品集 92 [章]』

BL, Shelf mark: 686. i. 3 [上巻] および 686. i. 4 [下巻]

この 1509 年刊行のアルド版は、Plut. の『*Opuscula* 小品集』の刊本としては初版本 (editio princeps) であり (上記 II.1)、Stephanus にとって『*Opuscula* [小品集]』の「元の本」になったと推定される本である。

**標題紙 (図 1) :** PLVTARCHI OPVSCULA. LXXXXII. この短いラテン語タイトル (ギリシャ語標題は無い) の下に、最初の折丁 (記号: +) に含まれる「目次」の見方の説明 6 行があり、(全作品の) 目次はこの折丁 (quaternion) に入っていて、「章」は算用数字で、その内部がさらに「節」に分かれている場合はその部分を「半頁組み」にして節題も入れ、「節番号」はギリシャ数詞で表記するという説明がある。標題紙には、刊記は無い。

本書の標題紙に、赤色の縦横単複線の罫線枠があるのは、後述する Stephanus 本 (686.b.1, 686.b.4, 686.b.13) および Aldus 本 (686.i.2) と同様であるが、Ald. 本では本文のほうには罫線枠は

13 但し『小品集』においては、70 を超える数の章があり、その内部がさらに細かい題目に分割されているものも数章ある。それら全てについて追究する時間的余裕は今回もなかったが、大筋の理解はできたと考えている。

ない。

タイトルの下に、Aldus の名高い商標「錨に絡むイルカ」がある<sup>14</sup>。

その下に < CMC | MVSEVM | BRITANNICVM > の黒色スタンプ。以後ブランク。

**刊記**： < Venetiis: in ædibus Aldi et Andreæ Asulani Soceri, mense Martio M.D.IX<sup>15</sup>. > 「ヴェネツィア 1509 年 3 月」は、p.1050 [下巻] 末尾の「折丁表」の下に入っている。

**BL**： Shelf mark: 686. i. 3 [上巻] および 686. i. 4 [下巻]

**判型**： In-folio： ca. 280 × 175mm. 1 頁 46 行。

**本文の総ページ数**： 1050 頁 (= [上巻] 1 ~ 484 + [下巻] 485 ~ 1050)。

**折丁構成**： 66 (= 1 + 65) 折丁。[下巻] の巻末 (p.1050) に全体の折丁表 (折丁数合計： 65) があり「最終折丁 (ternion： 3 枚綴 6 紙葉 12 頁) を除くすべての折丁が quaternion (4 枚綴 8 紙葉 16 頁) である」という。ただしこの折丁表には、+ の折丁記号をもつ巻頭の第 1 折丁は入っていない。また、この 2 点の本文には頁付と折丁付の両方がなされているが、標題紙に始まる第 1 折丁のみは、頁付を全くもたない。そこから Irigoien は、第 1 折丁は本体より後に作成されたものと推定している<sup>16</sup>。

**装訂**： 2 点 (前半・後半) と同じ赤い革表紙本で、中央に押された金の紋章は「Spade Shield Armorial Style であり 18 世紀後半の装訂」<sup>17</sup>。

前項 III (注 12) に引いた Irigoien の記述する『小品集』は、「分厚いフォリオ版 1 点 <un gros volume in-folio>」ということである。今回閲覧した BL の同刊記本は、本文の総頁数 (通し頁で 1050) は同じであるが次のように前半部と後半部に分割されて、同じ判型の 2 点に装訂されている。

**前半部／上巻** (Shelf mark: 686. i. 3)：

+ i. recto 標題紙に続く部分： + i. verso から + ii. recto にかけて、Aldus からペルーシア出身のユマニスト Iacobus Antiquarius<sup>18</sup> (1444 ~ 1512) にあてた献辞 (日付は < Venetiis, mense Martio, MDIX >) がある。すぐその次行から、標題紙で説明された形式での複雑な目次が始まる。その 1 例として「十大弁論家伝」p.668 ~ をふくむ箇所を、本稿図 3 に示す。

14 この本の「錨の両側」には、ALDVS | M. R. [= Aldus Manutius Romanus] などの文字は無い。Irigoien の見た同刊記本の標題紙 (*op.cit.* p.cclxxxvii) とは異なるものであろう。ただし、錨の両側に文字のついた商標は、後述する下巻 (686.i.4) において、全体の巻末 (最終頁のあとの頁付のない頁 [p.1052]) に見られる。

15 上掲注 6。

16 上述本稿注 12。実際、「目次」の組み方には不規則と見える箇所もあり、それもこのイリグワンの推定 (*op.cit.* p.cclxxxvii) を裏付けるものであろう。

17 早稲田大学名誉教授雪嶋宏一氏のご教示 (2023.11.29 付メール) による。なお同氏の論考 < Pagination printed by Aldus Manutius > (in *Bibliothecae. it.* 9 (2020), 1, p. 1-31) によれば、Aldus Manutius (ca.1450-1550) は頁付の本を出した最初の人であるが、この 1509 年版プルタルコスは、かれの仕事の中で <the largest paginated book printed by Aldus.> である (p.18) とされている。

18 <Antiquarius> の史実に即した意味 [写字生／出版者など] については調査未完了。

目次は+ 8 recto まで13頁にわたる<sup>19</sup>。+ 8 verso のギリシャ語短詩(J. Aléandre から Aldo 宛)、D. Doucas から読者宛の序については、上述注12の文献参照。

**本文 p.1 ~ 484** : <Περὶ παιδῶν ἀγωγῆς> 「子どもの教育について」から <Περὶ δυσωπίας> 「過度の羞恥心/気弱さについて」まで。

新しい折丁 (fol. + ai) で始まる本文 p.1 には冒頭のオーナメントは無く、これはこの1509年版2点に共通するが、本文各章冒頭の飾り頭文字も、それを入れるべき場所が縦5行分の正方形として空けてあり、入るべき文字が小文字で指示されただけの形をとっている。

**後半部/下巻** (Shelf mark: 686. i. 4) :

巻初には見返し紙2葉(ブランクで第2紙葉裏にBLによる鉛筆書きの Shelf mark: 686.b.4 があるのみ)に続けてすぐに、前半と同形式の本文が始まる。この始まり方は、二分割が編集/印行者の意図ではなく装訂の段階でなされた故のもの、とみる根拠のひとつと解してよいであろう。

**本文 p.485 ~ 1050** : <Περὶ φιλαδελφίας> 「兄弟愛について」から <Περὶ τῆς ἠροδότου κακοηθείας> 「ヘロドトスの悪意について」まで。この巻末の1章(p.1032 ~ 1050)は、Steph.1572年版『小品集』では「アリストファネスとメナンドロスの比較」の次に移される。

後半部には、p.709 ~ : Otho, p.741 ~ : Galba の2名が史実とは逆の順で入っている。この709及び741なる数字は、成蹊本 Steph.1572年版『小品集』の欄外数字: Galba (p.1488 ~ : marg. 741 ~)、Otho (p.1513 ~ : marg. 709) と対応している。Steph. 1572版では「目録(4)」p.106に記したように、在位期間が非常に短い二人のローマ皇帝(Galba: AD 68 ~ 69, Otho: AD 69, 1月 ~ 4月)を、順序は史実に合わせて入れ替え、二人をまとめた位置に配置換えした上で掲載場所は『列伝』に移さずに、Ald.1509年版と同様『小品集』に留めることになる(図3、図4)。

p.1050の本文末にギリシャ語で T E Λ O Σ [完]、その下に全体の折丁一覧と年記があって、BLのスタンプ(CMC|MVSEVMBRITANNICUM)となる。次頁はブランク。[p.1052]に当たる頁に「錨に絡むイルカ」のマークがあるが、標題紙と異なって錨の両側に <ALDVS> と <M. R.> [= Manutius Romanus] が入っている。

Ald.1509年版本と Steph.1572年版本の各章の数え方及び配列上の相違点については、先に引いた Irigoien の記述 (p. cclxxxvii - ccxcii) 中对照表と説明があるので、それに譲りたい。「目録4」p.105 ~ 110に記した Steph. 本の書誌面とくに「欄外数字」の考察と今回の BL 本調査を合わせると、『小品集』については、Stephanus が1572年版の印刷に使った「元の本」は Ald. 1509年版で

19 書物の内容を概観するための目次の見易さという点では、Steph.1572年版『小品集』の目次 <Catalogus Opusculorum> は「進化している」といえるかもしれない。本学蔵本第1巻についてみれば、p.13に「H. Stephanus から読者への序」があって、全3巻の各巻別を明示しながら全体としての通し頁を表示する方式の採用が説明されており、「各小品の目次」は第1巻 p.13 ~ 16 に収まっている。各小品の中がさらに章に分けられている場合にはここには表示せず、当該箇所「中扉」の形で更なる細分化を示す形をとる、という工夫がなされているためであろう。その1例としては、第3巻 [p.1607] を「中扉」として「章全体の標題紙: Plutarchi Scripta alia philosophica」を入れ、項目ごとに細分化した目次を2欄組で p.1608 ~ 1611 の半ばまで入れ、それにすぐ続けて本文を p.1611 から始める、という形をとっている。

ある、と言いうる。

V. ΠΛΟΥΤΑΡΧΟΥ ΠΑΡΑΛΛΗΛΑ ΕΝ |ΒΙΟΙΣ ΕΛΛΗΝΩΝ ΤΕ ΚΑΙ |ΡΩΜΑΙΩΝ. μθ'.  
 アルド版『プルタルコス ギリシャ人とローマ人との対比列伝 49章』  
 BL, Shelf mark: 686. i. 2

この [1519年刊行の] Ald. 版は、Plut. の『*Vitae* 列伝』の刊本としては初版本ではないが、Stephanus にとって『列伝』の「元の本」になったと推定される1巻である<sup>20</sup>。

**刊記**：このBL本 (686.i.2) では、標題紙にも巻末にも、刊記は無い。

**判型と装訂**：茶色革で、上下の表紙には大きな菱形の金色の線文様が押された、小口と天地が金の装訂は「18世紀英国の典型的なパネル装訂<sup>21</sup>」。「フォリオ判」だが前項のAld.1509年版『小品集』(686. i. 3および686. i. 4) より一回り大きい。

各章の始めのオーナメントはいっさい無い。文初の飾り頭文字は、入れるべき1文字が、5行分の正方形の中に小文字で指示されているのみ。この点では1509年の『小品集』と同様である。標題紙に赤色の縦横単複線の罫線枠があるのは、前項のAldus本 (686.i.3) およびStephanus本 (686.b.1, 686.b.4, 686.b.13) と同様であるが、線の数や引き方はそれぞれに異なっていて、こちらでは、標題紙の各行やその下の商標の図柄の中にまで赤いタッチが及んでいる。

**標題紙 (図2)**：Πλουτάρχου Παράλληλα ἐν |Βίοις Ἑλλήνων τε καὶ |Ῥωμαίων. μθ'. 『プルタルコスによる、ギリシャ人とローマ人との対比列伝 49章』。

このギリシャ語タイトル<sup>22</sup>の下にラテン語9行で：「対比列伝とよばれるプルタルコス作品。ギリシャとラテンの名をもつ卓越した人物たちの伝記で、それぞれ二人一組がお互いにふさわしいと思われるように配列されている。」との説明がある。前項 (1509年版『小品集』と同じ「錨に絡むイルカ」のマークがあるが、こちらは錨の両側に <ALDVS> と <M. R.> [= Manutius Romanus] なる文字が入っていて、この点では、本稿前述の、Irigoin の記述した (*op.cit.* p.cclxxxvii) 『小品集』と同じである。なお、この本の最終の頁付 (p.345) の裏で本文の無い頁には、「錨にからむイルカ」および < \* ALDVS \* > < \* MA.RO. \* > 入りのマークが入っているが、Aldus と Ma. Ro. の両側に \* の印が入っている点では標題紙のマークとは少し異なる。

標題紙裏には <MVSEVM|BRITAN|NICVM の朱色スタンプ、その見開き頁に Franciscus Asulanus Petro Bembo | LEONIS X. PONT.MAX. A SECRETIS SALVTEM P. D.>. 刊行者 (Andrea d'Asola の息子) から教皇レオ10世の枢機卿でケケロ学者のピエトロ・ベンボ (1470 ~ 1547) に宛てた献辞があり、そのフォリオ付は \* ii で、ここには頁付は無い。献辞の裏頁が 目次

20 「目録 (4)」p.108 参照：『列伝』初版はフィレンツェの Giunta による 1517 年版である。

21 雪嶋宏一氏のご教示 (2023.11.29 付メール) による。

22 原本は大文字表記であるが、アクセント位置表示の便宜上、ここでは小文字表記とする。

<Βίων τῶν ἐφέξης περιεχομένων σχεσίς> になっていて、ここには、49章の総人数51人の名が、すべてギリシャ語表記で<sup>23</sup>、この頁の最下行までにおさめられている。その内容に入る前に、今回 BL で閲覧した8点の本のうち、この本「686. i. 2」だけに見られたことを、それはこの本の頁付表示についてであるが、筆者にとっては初めて見る表示方式であったので、記しておきたい。

#### V - 1) Ald. 1519年版『列伝』(BL, Shelf mark: 686.i.2)のフォリオ付と頁付(図5)

この本には、複雑な折記号によるフォリオ付(頁右下)と、算用数字による頁付(頁右上)とが併用されている。全体のフォリオ付は、記号 [fol.] aa [i] (quaternion) に始まり、[fol.] uu vv (quinion) に終わる。ローマ字とギリシャ文字(双方小文字のみで、前半は1文字ずつで aa から始め、後半 p.185 以後は双方2文字ずつを組み合わせる aa αα から始める4枚綴8紙葉16頁(quaternion)の折丁で、最終折丁のみが5枚綴10紙葉20頁(quinion)。

ここで注目されるのは、頁付の表示で、頁を示す数字は見開きの右頁つまり奇数頁(=表頁)のみに付されていて、裏頁には付されていない、という方式をとっていることである。つまり、この本の「頁付: 1」は現代一般にいう p.1 であるが、この本の「頁付: 2」は一般的に言えば p.3 に当たる頁に付されている、という形式である。また、巻末本文最後の人物 <Euagoras> は頁付 343 オモテから 345 ヌラに入っていて、これが本文最後の頁となっている。つまりこの本では、従来の折丁記号によるフォリオ付は維持したままそれと併用して「算用数字による頁付」も入れながら、「算用数字による頁付」のほうは表頁のみに付して裏頁には入れない、という方式をとっているのである。これは、中世手写本の場合のフォリオ付(折丁前半の表頁にのみにフォリオ付を入れて、裏頁には入れない表示方法)に似た表示方法である。印行者としては、手写本と印刷本が共存していた移行期にあって、当該箇所を参照するための、よりよい表示方法を試行しているところだったのであろうか<sup>24</sup>。

Aldus は、この1519版の「目次」を作るにさいしては、当該人物の章が裏頁から始まる場合でも、表頁に記した頁の数字をそのまま使っているのであるが、では Stephanus は、このような頁付をしている Ald. 1519版の頁付をメモ用の欄外数字として捨てる時に、当該の箇所が頁付をもたない頁にある場合、どのようにしたのか。前述のように、この Ald. 版ではフォリオ付も併用されているが、メモ用の「欄外数字」にするには複雑すぎるであろう。今回の実見では、彼が、裏・表を区別せずに Aldus の印刷した数字を捨てるのを原則としていることが見てとれた。いくつかの例をあげて Ald. 版の頁付と Steph. 版の欄外数字とを対比してみると次のようになる。この方式で頁付を

23 1例として: Marcus Coriolanus → Μάρκος Γάϊος.

24 この頁付については、BLでの閲覧時、この本を開いて最初に「目次」を一見したときに、50人近い人物の列伝としては、表示された頁の数字(1~345)が、本学蔵本の Steph. 1572年版『列伝』(判型 in-8°、3巻本の通し頁で1~1923)と比べて、判型の違いを考慮してもかなり小さいと感じたこと、また「目録(4)」p.109に、欄外数字の出方に関して『小品集』と『列伝』とは違いがあるがそれは「元の本」の判型や組み方の違いに由来するのではないかと述べたこと、これらの点について、今回の実見で、それがとくに頁付方式の違いに由来するものである、と理解できた。

する場合、とくに問題になるのは、当該の章が、裏頁から始まっている場合の、Steph. の表記のしかたであろう。いくつかの例を対比してみると、次のようになっている：

<u>Ald. 1519 年版の頁付</u>	・ ・ ・	<u>Steph. 1572 年版の欄外数字</u>
1. Marcellus 95 ウラ～ 101 ウラ	・ ・ ・	95 ～ 99 [このあと乱丁あり]
2. Cato minor 107 ウラ～ 118 ウラ	・ ・ ・	108 ～ 118
3. Artoxerxes 305 オモテ～ [記録漏れ]	・ ・ ・	305 ～ 309
4. Dion 310 オモテ～ 318 オモテ	・ ・ ・	310 ～ 318
5. Aratos 327 ウラ～ 335 オモテ	・ ・ ・	328 ～ [記録漏れ]

ここからは、Steph. が Ald. 版の頁付を拾う時に、その章が表頁から始まっている場合には当然そのまま表頁の数字を保つが（3，4）、裏頁から始まっている場合には、そのまま表頁の数字を保つ場合（1）と、表頁の次にくるはずであった数字を記す場合（2，5）と両方があると思われる。Steph. 版における欄外数字は、章の冒頭にある場合でも、常に各章冒頭の第 1 行に厳密に対応して記されているわけではなく、いわば「その付近に」記されていることが多い。欄外数字が、あくまで当該箇所を見つけるための「メモ・目印」として付けられたものであろう、と推定する所以である。

#### V - 2) Ald. [1519 年版] 『列伝』 (BL, 686.i.2) の目次 (図 6)

上述のように、ここには、49 章の中に総人数 51 人の名が 1 頁の中におさめられ、見易いリストになっている。ローマの人名もすべてギリシャ語表記<sup>25</sup>。51 名という人数は、Steph.1572 年版のそれよりも 3 名多い<sup>26</sup>。リストの末尾に、Ald.1509 年版および Steph.1572 年版では『小品集』に収載されている二人のローマ皇帝 (Galba と Otho) があり、また Steph. 版には無い「Euagoras」<sup>27</sup> の名が最終 51 番目に入っているためである。目次で 31 番目の Agesilaos にも \* が印刷されているのは、これら 2 作品をここに入れることへの疑義を記しているものとみえるが、今回の調査ではこの問題にはふみこまなかった。登場人物 Galba と Otho については、前述したように (本稿 IV 後半部・本文) Ald.1509 年版『小品集』には逆順で入っていたが、この『列伝』では、p.335～Galba, p. 340～Otho で、史実に沿った順になって、巻末の p.335～に入っている。なお Steph.1572 年版では、この 2 名は『列伝』には入らず、上述したように『小品集』中の章として、史実に沿う順序で入っている。

Steph. 1572 年版での欄外数字をたよりに「元の本」での人物配置を推定したさいに、筆者は、Ald. 版で逆になっていた「大カトー」と「小カトー」との位置が Steph. 版では入れ替えられて適

25 例として Coliolanus → Μάρκιος Γαϊός, Caesar → Καίσαρ など。

26 「目録 (4)」p.108 の 16 行目で「違いはない」としたのは訂正する。

27 これは前 5～4 世紀アテナイの弁論作家イソクラテスの作品で、親交のあったキプロス王エウアゴラス (前 435 頃～374/373) への追悼弁論。

正になっていることを、「目録(4)」p.108)において記した。このような登場人物の入れ替えは、この他にも次にあげる二つの例が、「目次」中程と末尾近くにある。

『列伝』の一对(2人一組)では、最初の Theseus と Romulus にあるように、「ギリシャ人が先」で「ローマ人が後」という形で人物が配置されている。今回閲覧した Aldus1519年版 BL本(686.i.2)の目次においてもその配置は保たれていて、上記29番目 Eumenes と30番目 Sertorius も例外ではない。ところが、Steph.1572年版(成蹊本)では、該当頁(p.)と欄外数字(; marg.)とを並記すると、Sertorius (p. 1037 ~ 1064 : marg.192 ~ 195), Eumenes (p.1064 ~ 1087 ; marg. 187 ~ 190)となっていて、この2人の順は、Ald.版とは逆の、いわば例外的な、「ローマ人が先」という順序である。Steph.は、「元の本」の目次の順序(それは欄外数字によって指示されている通りで「ギリシャ人 Eumenes が先」であって、それが Ald.1519年版 686.i.2の順でもある)を、入れ替えている<sup>28</sup>。

Eumenes - Sertorius 組に続く人物の順については、この BL の Ald.1519年版と成蹊本 Steph. 1572年版との間に違いはない。順序入れ替えの最後の例は巻末に近いところにある Dion - Brutus 組と Artoxerxes(単独)との順の例で、この BL本 Ald.では Artoxerxes が先だが、成蹊本 Steph.では Dion- Brutus 組が先、という違いである。これは成蹊本の欄外数字調査から推定された通りの入れ替えである(「目録4」p.108)。Galba, Otho については上述した<sup>29</sup>。

なお、『対比列伝』において二人一組のあとに「対比」部分がある場合、現代の刊本や翻訳でその部分に「対比/比較」という一節をたてることがあるが、今回見た Ald. や本学蔵本 Steph. 版においては、その部分は、二人目の人物を描く部分のあと1行あけることをせずに改行だけをするという形になっており、タイトルをつけて新しい節を設けることは、なされていない。

『紀要58号』の「目録(4)」p.108で、成蹊大学図書館蔵本の『列伝』における欄外数字の問題を扱ったさいに、筆者はその項の最後に次のように記した。少し長くなるが引用すると：

「『列伝』編集のさいに Steph. 1572年版の「元になった本」は何か。Renouard : (*Annales de l'imprimerie des Alde*, p.87 : Delaware 2003: repr. of 1834<sup>3</sup>, Paris)によれば、「Ald. 1519年版の『列伝』は、フォリオ判・同刊記で二度印行されたといわれていて、< Aldina I<sup>a</sup> >は Giunta 1517年版(『列伝』初版本)に倣ってつくられたと考えられる。< Aldina II<sup>a</sup> >のほうは、テキスト本文も、Giunta初版本よりも洗練・改良されていて、のちの Basel 版(1533年 Froben 印行)や H. Estienne 版(1572年 Stephanus 印行)、その他諸版の基盤になったものである」とのこと。しか

28 この箇所については、今回閲覧した Steph.1572年版全集の最終巻(Tom.13 *Appendix*)では、BL本 Ald.1519年版のとおり「ギリシャ人が先」となっている。

29 なお、「目録(4)」p.106に「< *Vitæ* Tom.1, p.569-572 欠 >の問題」として記した本学蔵本『列伝』Steph. 1572年版第1巻(請求記号: 880/P75/4)にみられる乱丁・落丁は、今回 BL で閲覧した同刊記本: Shelf mark 686.b.4には見られず、書誌上・内容上のつながりに異常は無かった。

し私たちの Steph.1572 年版『列伝』の「元の本」については、欄外数字との関連も考慮すると、現段階では明確な推定ができない。」

今回 BL での閲覧で確認できたはずの「Steph.1572 版『列伝』の元の本は Ald.1519 版である」は、大筋としては言いうると思う。ただ、BL 本 (686.i.2) に年記が見当たらなかったこととも併せて考えると、これが < Aldina II<sup>a</sup> > であって < Aldina I<sup>a</sup> > ではない、と断定するには、ためらいがある<sup>30</sup>。

BL のオンライン・カタログによると、Ald.1519 年版『列伝』は、上記以外にも 3 点ほど、同館に所蔵されている。その中で、この < 686.i.2 > について次の説明があるので、以下にその全文を引用する：

< G.R.C. 686.i.2. [Another copy.] \*\*\* Imperfect; wanting fol.4, which is blank; also the colophon, containing the register, place of imprint and date, and on the reverse the Aldine device, in place of which a leaf bearing the device only has been substituted. >

やはり報告者の見た BL 本 686.i.2 は、Renouard のいう < Aldina I<sup>a</sup> > なのであろうか。報告者がこれを選んだのは、これが本稿前述の『小品集／モラリア』(686.i.3-4) につながる shelf mark だったからであるが、とくに Ald.1519 年版『列伝』については、他の同刊記本も閲覧して見比べるべきであった。

この BL 本 Ald. 1519 年版が < Aldina I<sup>a</sup> > < Aldina II<sup>a</sup> > のどちらであるにせよ、本学図書館蔵本 Stephanus 1572 年版の『列伝』3 巻の「元の本」であるという推定(「目録(4)」p.107～108)は、欄外数字の調査と今回の Ald. 1519 年版(686.i.2) 閲覧とをつきあわせて、確かめることができた。では印行者自身にとってその「参照用メモ(欄外数字)」はどのように役立ったのか。メモ(欄外数字)が、まず生かされたと思えるところ、そのひとつが、Steph.1572 年版の最終巻の中にみられるのではないかと考える。

## VI. Stephanus1572 年版『Plutarchus 全集・最終巻 (Tom.13: Appendix)』

### BL, Shelf mark : 686.b.13

この、本学蔵本中には無い第 13 巻は、本稿冒頭および注 3 と注 4 にも記したように、刊行当初から非常に希少であったとされるものである。この一巻の構成内容に関しては、前号の拙稿「目録(4)」, p.104～以来本稿でもしばしば引用している、Irigoin による Budé 叢書の Plutarchus テクスト伝承史:<Plutarque Œuvres Morales, Tome I, 1<sup>re</sup> Partie (p. ccxxvii～cccxxiv)> 中の関連記述と相違するのではないかとと思われる点もあり、以下、この <Shelfmark 686.b.13> で報告者の見た

30 『紀要 58 号』「目録(4)」p.116, 図版 3 では、「アルド 1519 年版による『英雄伝』登場人物一覧表」という説明を付したが、これは、当該書物(岩波文庫昭和 27 年『プルターク英雄伝(一)』p.11)の訳者河野與一のいう「最初の版本 1509 年ヴェネツィアのアルドゥス版」を、本稿筆者が「1519 年」に変更して(1509 年は『モラリア』の刊行年であって『列伝』のではないから)つけた説明である。この図版では「15: セルトーリウスとエウメネス」のほかにも、今回閲覧した Ald. 本の順序とは一致しない点もあり、やはり「Ald.1519 年版『列伝』問題」はたいそう難しいと感じている。

ところを、概略であるが頁順に、やや詳しく記しておきたい。

BLで閲覧したStephanus1572年版Plutarch.全集の最終巻Tom.13 (Shelfmark 686.b.13)は、同時に閲覧した同番号2点(686.b.1, 686.b.4)と同じく、判型: in-8° ca. 175 x 115mmである<sup>31</sup>。総ページ数: 2~468。装訂については、上述のAld.版1509年版2点(BL: 686.i.3と686.i.4)とも共通する特徴であるが、同じく赤い革表紙で中央に金の紋章(「紋章はSpade Shield Armorial Styleであり18世紀後半の装訂」が押されているので、これら5点の旧蔵者は、少なくとも装訂時には、同一人であったと考えられる。

まず目につく特徴としては、全頁に、上下左右とも複線または単線の赤い罫線が引かれて枠取りがなされている形式(標題紙や各章のタイトル部分では各行にも赤い下線がある)で、これは今回閲覧した3点に共通している。本学蔵本にはまったく見られない特徴である。

#### VI-1) 『Appendix 付録』の巻初(p.2~)(図7)

巻初見返し紙の裏に鉛筆でBLのshelf mark <686.b.13>あり。この見返し紙に続く見開き頁に「標題紙」がある: 右上隅に頁付: 2、右下隅にフォリオ付: Aj [= fol. A<sub>1</sub>]あり。

<PLVTARCHI VITA-|RVM COMPARATAM | appendix: | complectens & ipsa Vitas excellentium | quorundam imperatorum, sed duas tantum comparatas: & has qui- | dem, à Donato Acciaiole, | caeteras verò, ab AE- | mylio Probo | conscriptas.>

和訳: 『プルタルコス対比列伝付録: 傑出せる将軍数名の伝記を取めるが、比較は2名のみでこれらはドナートゥス・アッチャイオルス作、この他にアエミリウス・プロブス [=コルネリウス・ネポース] 作の伝記を含む』<sup>32</sup>。

まず標題紙に、これが「『列伝』への付録」であることが明記されている。

標題紙裏に<CMC |MVSEVM |BRITANNICVM >の黒色スタンプ。次に目次はなく、見開き頁から[仮に第1部第1章とする]本文が始まる。

標題紙につづく本文はp.3に始まり、p.467に終わる。右上隅に頁付: 3、右下隅にフォリオ付: Aij [=fol. A<sub>2</sub>]あり。最終頁[p.468]にはBLのスタンプCMC|MVSEVM|BRITANNICVM)のみ。原則として1折丁8紙葉16頁。

1頁のテキスト行数: 39行 (p.390から巻末最終頁: p.467までの部分については後述)。また、この巻では『付録』全体の通し頁(p.1~468)はあるが、本文版面の形式の点では、大別して三

31 この判型と刊記は本学図書館蔵本にも共通する。今回BLでは、1日の閲覧点数が10点という制限もあり、この刊記本の686.b.1から686.b.13のすべてに目を通すことはできなかった。

32 このStephanus1572年版Plutarch.全集の最終巻(Tom.13)には、後述するように、「全体を表す標題」にあたるものは無い。刷上がった印刷紙は折丁を重ねるだけで出荷されていた当時としては必要がなかったためと考えられる。[第1部]というべき部分のこの標題と、p.205に始まる後半([第2部]として後述)部分の標題とは、内容は異なるが『全集』への『付録』である点および形式の点では同一と見えるので、本稿では[第1部第1章] 3行目冒頭の<appendix>を全体のタイトル『Appendix』として使う。

つの異なる形式がある。そのため、記述の便宜上、筆者が見た形式を「仮に第\*部第\*章」として以下に記す。

## VI - 2) 本文 [仮に第 1 部とする]

頁付：3、フォリオ付：[A.] ij.

ページ上部には、章タイトル第 1 行目の大文字活字 1 行分ほどのスペースで植物文様のオーナメントがあり、その下にタイトル部分が 5 行あるが、その 5 行の活字は、1 行目から順に（ただし 2, 3 行目は同ポイント）少しずつポイントを下げ小さくしてゆく形をとっている。また、各頁の本文小口側欄外に、本文 9～12 行目ごとの間隔で、内容上の区切りとは無関係に、A～D までのアルファベットが印字されているが、テキスト中の語句の指示や検索を容易にするためと考えられる。これらの形式は p.202 (Tacitus 作 *Agricola* の末尾) まで続くことになる。以下この本の区分ごとの題名を巻初から順に略記する<sup>33</sup>。

### p.3 ～：最初の章：[仮に第 1 部 第 1 章とする] (図 8)

植物文様オーナメントの下に章題のタイトルは 5 行：

VITAE COMPARATAE | ANNIBALIS ET | SCIPIONIS, | *DONATO ACCIAIOLO* | *autore potius quàm interprete.*

和訳：「ハンニバルとスキピオの比較伝記、ドナートウス・アッチャイオルス作／訳」。この作品が「15 世紀フィレンツェ出身の高名な文人・政治家である」アッチャイオリ家のドナートによる、翻訳というよりはむしろ創作である [5 行目]、との意味か。この章の前半 [ハンニバル伝] の項は、p.3A～49A で終わり、続けて後半の p.49A～84B に Vita Scipionis [スキピオ伝 (および 2 人の比較)] の項が入ってこの章は了となる。

以下、本稿では大文字は各頁の区切り記号 (9～12 行目ごとに A～D) と人名等の語頭にのみ使用する：

p.3A～49A: Vita Annibalis

p.49A～84B: Vita Scipionis

「ハンニバルとスキピオ」の章のあとは余白のままで頁が終わる。

### p. 85 A～ [仮に第 1 部 第 2 章とする]

[第 1 章] とは文様の細部が異なる動植物文様オーナメントの下に、章題が前章と同様の形式でおかれる。

p.85A : AEMILII PROBI, | SEV CORNELII NEPO-tis, De vita excellentium im-|peratorum, ad T. Pom-|ponium Atticum, | Liber prior. 「アエミリウス・プロプス (別名コルネリウス・ネポース)

33 内容については未調査の事柄も多く、記述が煩雑になるのを恐れてタイトルのみ記す。

による傑出せる将軍たちの伝記。ポンポニウス・アッティクス宛<sup>34</sup>、第1章]

- p.85B ~ 86C: Autoris Praefatio. [作者から P.Atticus に宛てた序章]  
p.86C ~ 91B: Miltiadis<sup>35</sup> Vita, I.  
p.91C ~ 97D: Themistoclis Vita, II.  
p.97D ~ 99A: Aristidis Vita, III.  
p.99B ~ 102B: Pausaniae Vita, IV.  
p.102C ~ 104B: Cimonis Vita, V.  
p.104C ~ 106C: Lysandri Vita, VI.  
p.106D ~ 114A: Alcibiadis Vita, VII.  
p.114B ~ 116B: Trasybuli Vita, VIII.  
p.116C ~ 119A: Cononis Vita, IX.  
p.119B ~ 124C: Dionis Vita, X.  
p.124D ~ 126A: Iphicratis Vita, XI.  
p.126B ~ 127D: Chabriæ Vita, XII.  
p.128A ~ 130A: Timothei Vita, XIII.  
p.130B ~ 136D: Damatis Vita, XIII.  
p.137A ~ 143B: Epaminondæ Vita, XV.  
p.143C ~ 146A: Pelopidæ Vita, XVI.  
p.146B ~ 151A: Agesilai Vita, XVII.  
p.151B ~ 159B: Eumenis Vita, XVIII.  
p.159C ~ 161B: Phocionis Vita, XIX.  
p.161C ~ 164C: Thymoleontis Vita, XX.  
p.164D ~ 166B: De Regibus Breuis notatio  
p.166C ~ 168B: Hamilcaris Vita, XXI.  
p.168C ~ 175D: Hannibalis Vita, XXII.

**p.176A~ [仮に第1部 第3章とする]** : 新しいオーナメントと、その下に章題あり :

FRAGMENTVM QVOD | ex Probi libro posteriore | superest. |M. PORTII<sup>36</sup> CATONIS | VITA.

「Nepos 作品の後半部分に残る断片。M. ポルキウス・カトー伝」。

p. 176A ~ 177D : incipit: Cato ortus municio Tusculo, adolescentulus,

34 Titus Pomponius Atticus (110 ~ 30 BC) : キケローとの文通で知られるローマの富裕な文人。政治に関わることを嫌い、好んでギリシャに滞在して「Atticus=アッティカ(アテネの都を中心とした地方)びと」の名をもつ。

35 以後、欄外右上のハシラには人名をラテン語式で主格表示してある(Agesilausのように)が、ここでは記述を省略する。

36 <M. Portii Catonis> は <M. Porcii Catonis> の誤植。p. 177 の欄外タイトルは <M. Porc. Cat. > 。

explicit: Quare studiosus Catonis ad illud volumen relegamus.

p.178A～次の章 [仮に第 1 部 第 4 章とする]: 新しいオーナメントと、その下に章題:

Iuli Agricola | Vita per Cornelium Tacitum eius | generum castissimè com- | posita.

「コルネリウス・タキトゥス作ユリウス・アグリコラ正伝」

p. 178 B ~ 202 D : Tacitus, Agricola

incipit: Clarorum virorum facta moresque posteris tradere,

explicit : Agricola posteritati narratus & traditus, superstes erit.

[p.178 = fol.Mj-verso]

p.203 ~ 204: この 2 頁ブランク<sup>37</sup>。[仮称・第 1 部第 4 章] 了。

### VI - 3) p.205 ~ p. 389 [仮に第 2 部とする] (図 9)

p.205 ~ p.389 部分のための標題紙は、上記 [第 1 部] の [第 5 章] というよりは、上述した [第 1 部・第 1 章] (仮称) の標題紙と同様の形式、すなわち同一頁 (ここでは p.205) にはオーナメントの無いタイトル部分だけが印刷されて、本文部分はその次のページ (ここではその裏 p.206) から始まる、という形式をとっている。また、p.205 右下の折丁記号 ([O] j.) は「折丁 O の第一紙葉オモテ」で、この部分が新しい折丁で始まっていることがわかる。またこの p. 205) 以後には、前章 [仮称第 1 部] にあった、本文 9 ~ 12 行目ごとの間隔で内容上の区切りとは無関係に印字された A ~ D までのアルファベットは無い。これらの形式上の違いから、この部分は、便宜的な区分としても「第 1 部第 5 章」というより、Plut. 全集第 13 巻『付録』の [第 2 部] と見ることが適切であろう。

標題紙: < IN VITAS PLVTAR|chi parallelas. |ANNOTATIONES| In quibus multi Plutarchi loci emendantur ac re|stituuntur, multi explicantur: quidam ex | aliis quoque autoribus eodem| modo tractantur. > 「プルタルコス『列伝』注釈。ここではプルタルコスの多くの箇所が訂正・復元され、説明されていて、数人の筆者もまた同様に協力している」。

ここでいう、Pl. 作品への訂正等は、この 1572 年版全集第 1 巻の標題紙に記されていた、印行者 Henricus Stephanus (= Henri II Estienne) 自身による本文の訂正・復元・注釈に加えて複数の著作からの解釈／翻訳も掲載する、という言明に沿うものといえる<sup>38</sup>。

37 このブランクは次に続くページを新しい折丁で始める必要から生じたものと考えられる。

38 この関連事項として、本学図書館蔵本の Stephanus1572 年版の第 1 部第 1 巻の標題紙について、『紀要 58 号』「解説目録 (4)」p.102, 3) に次の訂正をする: 「標題紙 (図版 1) の 11 行目 AEMILII を AEMYLII にする。この行の後半はママとする。続く 12 行目から 14 行目までの 3 行を一旦すべて抹消し、その代わりに、12 ~ 13 行目に「Aemilius Probus [別名] Cornelius Nepos による、傑出せる将軍たちの生涯についての書。cf. A.A. Renouard, *Annales de l'imprimerie des Estienne*, p.134.」を入れる。訂正は以上。丁寧なメール (2023.5.20. 付) によって当該項筆者 (AH) の誤りを指摘し、Nepos の呼称について詳細なご教示をくださった東京都立大学名誉教授大芝芳弘氏に厚くお礼申し上げます。

p. 206 : G. Xylander から読者への序文。G. Xylander (= Wilhelm Holzmann 1532 ~ 76), <born in Augsburg, and professor and librarian in Heidelberg from 1558><sup>39</sup>. Steph.1572 年版ではラテン語訳を分担した Xylander が、以下の注釈を主導したことがわかる (図 10)。

p.207 (=fol.[O].ij.)~: IN PLVT. THESEVM ANNO-tationes Guil. Xylandri & Herm. Cruserii, in-terpretum: quarum has ab illis discer-hnes hac nota in fine τῆς παραση-μειώσεως apposita, Cr. 5 行にわたる章タイトル。それにつづく本文 (incipit: Vtile est admodum,) は、1 欄 48 行・左右 2 欄組みとなり、『列伝』の登場人物についての、G. Xylander と H. Cruserius (= Hermann Cruser, 1510 ~ 74) による注釈が、p. 383 まで続く。途中、Dion - Brutus 組と Agis - Cleomenes 組との順が、『列伝』本文の順とは入れ替わっている。Galba - Otho については <In Galbam annotationes Guil. Xylandri interpretis> とあって、Cruserius の名はない。

p. 207 (= fol. [O].ij.) ~ : In Plut. Theseum に続いて

p. 212 ~ : In Plut. Romulum Annotationes,

p. 216 ~ : In Plut. Lycurgum …

p. 220 ~ : In Plut. Numam …

p. 225 ~ : In Plut. Solonem …

p. 229 ~ : in Plut. Poplicolam …

p. 232 ~ : in Plut. Themistoclem …

p. 235 ~ : in Plut. Camillum …

p. 239 ~ : in Plut. Periclem … [p.240 に Pericles の系図あり]

p. 247 ~ : in Plut. Fabium …

p. 252 ~ : in Plut. Alcibiadem …

p. 257 ~ : in Plut. C. Marcium Coriolanum …

p. 262 ~ : in Plut. Timocleontem …

p. 267 ~ : in Aemilium Paul. Annotationes … [この項以後< Plut. >が省略されている]

p. 276 ~ : in Pelopidam …

p. 279 ~ : in Marcellum …

p. 285 ~ : in Aristidem …

p. 287 ~ : in Catonem maiorem … [Cato の順序は訂正されている]

p. 290 ~ : in Philopoemenem …

p. 292 ~ : in T. Quinct. Flaminium …

p. 295 ~ : in Pyrrhum …

p. 300 ~ : in Marium …

p. 305 ~ : in Lysandrum…

- p. 310 ~ : in Syllam ...
- p. 313 ~ : in Cimonem ...
- p. 315 ~ : in Lucullum ...
- p. 317 ~ : in Niciam ...
- p. 319 ~ : in Crassi Vitam ...
- p. 323 ~ : in Eumenem ... [Tom.III.p.1037 ~ 87 の本文を訂正してギリシヤ人 Eumenes を
- p. 324 ~ : in Sertorium ... ローマ人 Sertorius より先に置いている]
- p. 325 ~ : in Agesilaum ...
- p. 327 ~ : in Pompeium ...
- p. 332 ~ : in Alexandrum ... [Heracles と Deianeira の結婚に始まる長い系図あり]
- p. 338 ~ : in Caesarem ...
- p. 340 ~ : in Phocionem ...
- p. 344 ~ : in Catonem Vticensem ... [Cato の順序は訂正されている]
- p. 349 ~ : in Dionem ... [Dion-Brutus 組と Agis-Cleomenes. 組の順序については上記]
- p. 351 ~ : in Brutum ...
- p. 355 ~ : in Demostenem ...
- p. 357 ~ : in Ciceronem ...
- p. 362 ~ : in Demetrium ...
- p. 365 ~ : in Antonium ...
- p. 369 ~ : in Agidem ... [Agis-Cleomenes 組の順序については上記]
- p. 371 ~ : in Cleomenem ...
- p. 374 ~ : in Ti. Gracchum ...
- p. 375 ~ : in C. Gracchum ... [[「対比」部分への (In comparationem) 注あり]
- p. 376 ~ : in Artoxerxem ...
- p. 378 ~ : in Aratum...
- p. 380 ~ : in Galbam...
- p. 383 ~ : in Othonem...
- p.383, ligne 11 ~ p. 389 : De Mensibus Atticis Guil. Xylandri appendix. [Xylander によるアッ  
ティカの暦とローマの暦との対照]<sup>40</sup>

この Xylander による注釈の「登場人物一覧」には、私たちの課題のひとつであった「欄外数字」の問題への回答の糸口があると思う。上記の一覧表中の < p.287, p.344 > の「大カトー・小カトー」

40 章初 p. 207 のフォリオ付が [O] ij. (= fol. [O].2) であることは記したが、章末 p.389 のフォリオ付および Galba-Otho の項の注内容については、本稿筆者の不注意で記録が欠落している。

の位置交換については既に「目録(4)」p.108で推定根拠のひとつとしたことであるが、同様の例として、<p.323～324: Eumenes・Sertorius>の位置の置き換えを例にとっても、Steph.1572年版p.1037～の欄外数字がAld. 1519年版のp.186～に合致することを前章のBL本(686.i.2)閲覧によって確かめた上でみると、Stephanusが1572年版本文に欄外数字を入れたのは、最後の『付録』において訂正する可能性をも予定していたからではないか、とも考えられる。

#### VI-4) p. 390～466 [仮に第3部とする]: H. ステファヌスによる『列伝』への注釈(図11)

この章は前章p.389の裏頁であるp.390からp.466までで、第13巻『付録』の巻末である。最初の頁(p.390)は、これまでの章のようなオーナメントが無く、標題が1欄組み6行で入る。それに続く本文部分は、前章と同様、同頁に左右2欄組みの形式をとり、1頁あたりの行数は48行。頁付は上述のように切れ目なく連続しているが、これまで右下隅にあったフォリオ付が、ここp.390から巻末p.467まで無い。[仮称第1部]にあった、本文で内容上の区切りとは無関係に印字されていたA～Dのアルファベットも無く、これは前章と同様。内容面での違いに加えてこのような形式の違いが見られることから、この部分は、前章に続く[第2部第2章]というより、Steph.1572年版Tom.13『付録』中の[第3部]とみるべきであろう。

標題部分: HENRICI STEPHANI ANNO-[tationes in suam editionem vitarum Plutarchi: in eos |videlicet locos quorum lectiones partim ex veterum |codicum autoritate mutatae fuerunt, aut mutandae sunt:| partim etiam ex coniectura mutandae videntur. Alicubi |autem & de interpretatione obiter in iisdem agitur.

タイトルによれば、以下はH. ステファヌスによる、自身の印行した『列伝』への注釈で、古写本の読みに従って訂正済みあるいは要訂正としている箇所と、それに加えて[自分の]推定で要訂正とみえるところもある、また時に正しい読みが問題になるその箇所で解釈/翻訳まで問題になる場合がある、という。この説明は、かれがプルタルコス全集の冒頭第1巻の標題紙に言明していたことでもあって、かれの本文校訂への意図と意欲が読みとれるところである<sup>41</sup>。

p.390本文最初の注(『列伝』冒頭の人物Theseusの項: Pag.3.v. πν.)においては、<ένίους παραγράφουσιν>という読みに対して<αίτίας παραγράφουσιν>としている写本もあると指摘し、XylanderやCruseriusがラテン語訳にさいしてένίουςのほうを採用したのを検討して<Gallicus

41 本稿筆者による「目録4, p.102」参照。かれのこの意図は、本稿筆者の知る限りでは、彼が3年後1575年に印行する<Oratorum Veterum Orationes>の献辞に述べる趣旨にもつながり、『古代弁論家集』では本文校訂のための欄外注という形で顕在化することになる。拙稿『成蹊大学文学部紀要(19)』(1983年p.20～26)、『船の旅 本の旅』(書肆アルス2022年p.257～260)。

autem interpres illam ex vet. Cod. petitam lectionem αἰτίας sequuntus est. > 「しかしガリアびと<sup>42</sup>たる解釈者 [自分] は古写本の読みに従う」とする。

Stephanus の注は、『列伝』本文最初の頁についてのものは、ほぼ 1 頁半に及ぶ長いものであるが、短いものでは次の「ロムルス」の項の、< p. 4. v. Ρομ. ] Pro μὲν legitur etiam γάρ.> のような項もあり、p.466 の Aratos の項（『列伝』本文 p. 1921）末尾への注：<v. γῶν] Quidam vet. habent τόπω.> で終わる。

『Appendix 付録』の巻末 (p. 467 ~ 468) :

p.467 で章のタイトルが変わって < EMENDANDI LOCI IN LATI|na vitarum Plutarchi interpretatione. > 「『列伝』のラテン語訳部分について訂正すべき箇所」となり、この 1 頁のみで終わる。

正誤表本文は 1 欄組みにもどり、Tome 1 については 19 行、Tome 2 では 7 行、Tome 3 では 5 行で、計 31 行分の誤植等が指摘されている。そしてこの第 13 巻全体の最終頁 (p.468) はブラントで、黒いスタンプ：<CMC| MVSEUM| BRITANNICVM|> が押されているのみである。

#### VI - 5) 『Stephanus 1572 年版プルタルコス全集第 13 巻：付録』の構成

今回 BL において Shelf mark: 686.b.13 に目を通した結果、「Plut. 全集第 13 巻」の構成に関して、筆者にとっては新しい問題がでてきたと考えている。

すなわち問題は、「Stephanus 1572 年版 Plutarchus 全集第 13 巻の巻末には H. ステファヌスによる注釈が収録されているが、その「注釈」には『列伝』注釈を収録した版（今回閲覧した BL 本 686.b.13 のように）と『小品集／モラリア』注釈を収録した版（Irigoin の記述した本のように）とがある、つまり少なくとも 2 種類の異なる版があるらしい」ということになる。

今回閲覧した BL 本第 13 巻は、すでに「標題紙」のタイトルでも明記されていたように『列伝／Vitae への付録』であって、その後半部分には、p.205 ~ 389 に Xylander らによる『列伝』注釈があり、それに続いて p.390 ~ p.466 に Stephanus 自身による注釈があるが、いずれも『列伝』への注釈であって、『小品集／モラリア』への注釈は、この本には無い。本稿上記：Ⅲ. 欄外数字の項に記した、Budé 叢書の Irigoin 論考：(p. ccxcvi ~ ccxcvii) にある同刊記本とは、内容が異なっている、と考えられる。その論考 (p. ccxcvii) によれば、「H. Stephanus は当初から、全集には自身による注釈 (Annotationes) も付加することを言明していた。その Annotationes は (Steph. 1572 年版の) 最終巻たる第 13 巻にあり、『モラリア』関係部分は、Stephanus によるラテン語訳部分も

42 ルネッサンス時代の人文主義者たちに言及するさい、<Gallicus> を半ば自動的に「フランス人」とするのが最適かどうか、本稿筆者には迷いがある。ハイデルベルク大学所属の Xylander (= Wilhelm Holzmann, 1532 ~ 76) を「ドイツ人」としてよいか、の場合とも共通するが—かれらはおそらくラテン語を共通語として仕事をした人々だったであろうから。

含みつつ「総索引(p.1~135)」に続く位置即ちp.1~235を占めている」<sup>43</sup>とのことであるから。ここには『列伝』関係注釈の有無についての言及はないが、Irigoinの記述した「Plut.全集第13巻」が、今回閲覧したBL本第13巻(ここには、Steph.による『小品集/モラリア』注釈とその直前の「総索引」とが無い)とは、同刊記でも構成内容の異なる本であると考えざるをえない。

Irigoinが見た(と想定される)本について、もうひとつの注目点は、ここでは「総索引」と「注釈」という二つの部分の頁付が共にp.1から始まっていることで、Irigoinの記述する第13巻の巻末は、二つの部分の「寄せ集め」によって作られていることを示すと考えられることであろう。

そして「寄せ集め」である可能性という点では、このBL本第13巻もおそらく同様であろう。上述VI-3)で「仮称第2部」とした部分およびそれと頁の表裏という、形の上では繋がっている「仮称第3部」は、「寄せ集められた部分」かもしれない。言い換えればBL本(686. b.13)全体は、「仮称第1部(p.2~202+ブランク2頁)」と「仮称第2部+仮称第3部(p.205~468)」との二つの部分を寄せ集めて出来上がっている本と考えられるのではないか。ただ、大きな違いは、こちらには通し頁がついていることである。

すでに記したように「Stephanus1572年版Plutarchus全集の第13巻」は刊行当初から希少なものであった、という。それは、この巻にある複雑な成立事情とも関係があるのであろう。また「年記」のないAld.[1519年]版『列伝』BL本(686. i.2)についての疑問を反芻し、繰返しになるが、印刷し折り畳まれて重ねられた折丁は製本されずにそのまま出荷され売られていたという当時の状況をも考え合わせて、「同刊記本であっても内容は必ずしも同一ではない」初期刊本を調べることの難しさ、そしてその「迷宮」の入口に近寄る面白さを、今までにも増して強く感じている。

## VII. Plutarchus 全集：1599年 Frankfurt 版

BL, Shelf mark: 1487. y. 4.

標題紙(図12)：ΠΛΟΥΤΑΡΧΟΥ|ΧΑΙΡΩΝΕΩΣ|ΤΑ ΣΩΖΟΜΕΝΑ|ΠΑΝΤΑ. | PLVTARCHI CHÆRO-  
NENSIS QVÆ EXSTANT | OMNIA, | CVM| Latina interpretatione Hermanni Crusenij : | Gulielmi  
Xylandri, | ET | *DOCTORUM VIRORUM NOTIS*, | ET| LIBELLIS VARIANTIVM  
LECTIONVM | ex Mss. Codd. diligenter collectarum, | *ET INDICIBVS ACCVRATIS*.

[次に二つの手に支えられたヘルメスの杖の上に天馬ペガサスを配したA.Wechelのプリンターズマークが入り、その下に]

43 <Elles [= *Annotations*] se trouvent dans le volume XIII et dernier, dont la partie relative aux *Œuvres morales* occupe les p. 1-235 ; elles font suite, avec quelques traductions latines dues à Henri Estienne, à l'index général (p. 1-135) [後略] >, Budé 叢書 *Plutarque Œuvres Morales*, Tome I, 1<sup>re</sup> Partie (p. ccxcvii). なお、l'index général については Irigoin の注記中に < J. Jehasse, *La renaissance de la critique. L'essor de l'Humanisme érudit de 1560 à 1614*, Saint-Etienne, 1976, p. 119-121. > が挙げられているが、本稿筆者未見。

FRANCOFVRTI, |Apud Andreae Wecheli heredes, | Claudium Marnium, & Ioannem Aubrium. |  
M. D. X CI X. [原著のギリシャ字表記にはアクセントは付いていない]。

**VII - 1) 標題と刊記：**「プルタルコス伝存作品全集。H. Crusenius 及び G. Xylander によるラテン語訳、博識ある学者たちによる注、諸写本から丹念に集められた本文の異読及び正確な索引つき」。

刊行地：フランクフルト。

刊行者：「Andrea Wechelus の後継者たち」：Claudius Marnius, & Ioannes Aubrius<sup>44</sup>。

刊行年：1599 年。

**VII - 2) BL Shelf mark: 1487. y. 4 :**

2 巻本でそれぞれの上表紙に I、II が印刷されているが Shelf mark は 2 巻共通。

**判型：**大型フォリオ判<sup>45</sup>：ca. 390 × 240 mm. 版面：ca. 320 × 180 mm.

**Plutarchus 作品<sup>46</sup> 本文の頁数：**第 I 巻 *Vitae Parallelae* 本文：p.1 ~ 1076.

第 II 巻 *Moralia* 本文：p.1 ~ 1147.

「総ページ数」：第 I 巻・第 II 巻とも、標題にうたわれたとおり本文の前と後にはそれぞれ数十頁にわたる前置き部分や注釈、索引等々があり、それらが各々それぞれの頁付やフォリオ付をもって、いわば「入れ子状態」で収載されている場合が多いので、それらすべてをまとめた「通しの総ページ数」は、報告者の閲覧メモからはすぐに出すことができない。第 II 巻巻末に、2 巻分の複雑な折丁表があるが、報告者は、まだ「折丁記号から頁数へ」の計算をしていない (図 13)。

**オーナメント：**標題紙はもちろんであるが、この 2 巻では各章初めのオーナメントや冒頭の飾り頭文字が、動植物や人物を配したたいそう複雑な面白い図柄である。

**装訂<sup>47</sup>：**19 世紀末から 20 世紀初め頃の背革ボード装。標題紙ウラに貼付された、焦茶色の革に金で豪華な図柄を入れた紋章は英国王室のもの。

**VII - 3 - 1) Shelf mark: 1487. y. 4 : 第 I 巻『列伝』**

第 1 巻は、fol. †2 「内容一覧」から始まる (各章のページ表示はまだここには無い)。この本の

44 Andrea Wechel (1581 年没) は、1550 年代のバリで古典の印刷に携わり、新教徒迫害を逃れて 1572 年以來フランクフルトに移って事業を続けた。その「後継者」2 人：Claude Marne と Johann Aubry は 16 世紀から 17 世紀にかけて古典作品を数多く刊行している。対訳を担った Hermann Crusier (1510? ~ 71/75?) はネーデルラント出身のフマニスト・外交官。G. Xylander (W. Holtzmann, 1532 ~ 76) と共に、本稿では Steph.1572 年版の最終巻『付録』において言及している。

45 重量 \*\* kg. と計測表示をしたいような、超大型の書物である。

46 *Vitae* を第 1 巻に置き、*Opuscula* の題名を *Moralia* として第 2 巻にしたのは、この 1599 年版が最初であろう。

47 雪嶋宏一氏のご教示 (次の WEB サイト表示を含む 2023.11.29 付のメール) による：<https://blogs.bl.uk/untoldlives/2018/10/the-royals-are-here.htm>

刊行者二人 (Cl. Marnius & Jo. Aubrius) の名で Ioannes Vulcobius に宛てた書簡<sup>48</sup> が置かれたあと、fol. †2v~†3: Catalogus Eorum Omnium [以下略] として見開き2頁にわたる、第1巻および第2巻の内容一覧がある。ここでは (これは Ald.1509 et 1519, Steph. 1572年版のいずれとも異なるのであるが)、プルタルコスの全作品 (opera omnia) が、『列伝』にあたる各章は Tomus primus「第1巻」として、『小品集』にあたる各章は Tomus vero secundus「確かに第2巻」としていることが注目される。この「確かに」は、巻の順序を、これ以前の版とは逆にしたことを意味する表現であろうから。

**VII - 3 - 2) 第1巻の目次:** 作品番号・各章題名・該当頁の3点を明示した「目次」は、「内容一覧」のあと、Sudaからの引用、Lamprias de Scriptis Plutarchi のラテン語対訳、Steph. 1572年版第13巻にも協力した H.Cruserius のスペイン王宛の1564年9月1日付書簡と読者への1561年付の献辞などが続いたあとに、fol. ††5 recto になって、出てくる。そのタイトルは:

<Catalogus eorum, quae Tomo priore per Plutarchum tractata continentur, specialis: additis habens numeros, qui paginas, ubi unumquodq; singulatim quaerendum sit, ostendunt.> とあってこのような、各章に対応した、数字による頁付のついた目次というものが当時としては特筆すべき試みであったことを語っている (図14)。

この「目次」で各章 (各人物) の配置順をみると、1)「大カトー」/「小カトー」の位置は「大」が先、2) Sertorius/Eumenes では「例外的な」順、3) Dion-Brutus 組が Artoxerxes より先、となっていて、これら3か所の順は、前述した Ald.1519年版の順ではなく、Steph.1572年版の順に一致している。この目次の最後46番目は <Aratus p.1027 ~> であって、ここには Galba, Otho は載っていない。しかし両者とも (ただし Galba は不完全な形で) 本文には入っている。これについては後述する。また、Galba - Otho 問題の経緯については、「目録(4)」p.105 ~ 106 参照。

「目次」に続く同頁に、プルタルコスが『列伝』の中で言及した作者たちのアルファベット順索引が、この頁裏最下行までを占める。

### VII - 3 - 3) 第1巻の標題紙: (図15)

目次頁裏の見開き = 右頁が、オーナメントのある『列伝』本文標題紙:

PLVTARCHI| CHÆRONENSIS| OMNIVM. QVÆ EX-stant, operum |  
TOMVS PRIMVS| *CONTINENS VITAS PARALLELAS* | Græcè & Latinè.

「カイロネイアの人プルタルコス全集第1巻『列伝』、ギリシャ語・ラテン語対訳」になる。この標題紙の裏はブランク。そして、その見開き頁が『列伝』第1章 (Theseus et Romulus) の始まり、

48 Irigoien (*op.cit.* 本稿注12. p. ccxcvii) は、この中で協力者として挙げられている名 (Louis Servin, Etienne Turnèbe, Jean Pélerin, Jacques Bongars, Paul Peteau) は、すべてフランス名である (les noms de ceux, tous français) と指摘している。

すなわち本文第 1 頁になる。タイトル最終行 (7 行目) に第 1 巻のラテン語訳者 H.Cruserius の名がある。

頁付は、右下隅に「フォリオ付:A. i.」あり。[p.1] の表示は無いが、この裏頁では左上隅に「頁付: 2」、その見開き頁の右上隅に「頁付: 3」。この形で本文終りまで続く。

#### VII - 3 - 4) 本文の形式: (図 17)

印刷の形式は、判型 ca. 390 × 240 mm、テキスト面: ca. 320 × 180 mm. 1 頁 55 行で、中央に幅 5 mm の余白があり、その中に 10 行目ごとの区切りを示す記号としてアルファベット大文字 (A~F) を置く。『列伝』本文最初の頁であるが、テキスト本文の配置は、各頁の小口側 (幅 ca. 93mm) にギリシャ語原文、のど側 (幅 ca. 80mm) に対応するラテン語訳を配置して、中央の幅 5 mm の余白に本文 10 行目ごとの区切り記号としてアルファベット大文字 (A~F) を入れる。この配置はこれ以後も、この『全集』2 巻を通して変わらない<sup>49</sup>。このような記号は、今回の調査のさいには、Stephanus 1572 版の第 13 巻『付録』の中では部分的に見られたが (上述 VI- 2)、『小品集』と『列伝』本文の中では、Ald. 版にも Steph. 版にも見られなかったものである。プルタルコス翻訳書の「凡例」にしばしば記される「各頁欄外の算用数字とアルファベット大文字」は、この「1599 年にフランクフルトで、Wechel の後継者たちによって刊行された Plutarchus 全集」の頁付数字と段落記号 A~F に由来するものであろう。

#### VII - 3 - 5) Galba と Otho

VII - 3 - 2) に上述したように、『列伝』の「目次」の最後 46 番目は <Aratus p. 1027 ~> であって、Galba, Otho は目次には載っていない。しかし両者とも (ただし Galba は不完全な形で) 本文には入っている。本文では、Aratus が <p.1052, fol.TTTTiiii-verso > で終わった後、その見開き右頁は <p.506, fol. VVi-recto > で、タイトルもない本文の途中から始まって頁上部のハシラは <LVCVLLVS > である、という乱丁がみられる<sup>50</sup>。これは p.491 から始まっていた Lucullus の章の折丁の中に頁付数字の誤植 (505 となるべきところを 506 とした) があったことと、その折丁 (fol. VVi) が、目次の最後にある Aratus の次に (目次になかった) Galba と Otho を入れるさいに、誤って再度使われて、Galba 前半部分が入るはずのところを組み込まれたこと、という二重のミスがあったためと考えられる。複雑な乱丁になっていて、結局 Galba の項は前半を欠いた、後半のみの形 (ラテン語訳では p.1065 <gladium cruentum ostendit > 以降末尾まで) の形で入っている。同じく目

49 このようにギリシャ語の方に幅を広く取る配置は、「ギリシャ語は饒舌、ラテン語は寡黙」の実例を視覚化していて面白い。「1 頁 / 55 行」はギリシャ語部分が 1 頁に入りうる最大の行数で、それでも足りない場合には、ラテン語部分の下の余白に入れる例もある。

50 Lucullus のほうは、目次のとおり p.491 ~ 522 に順当に入っているが、途中 p. 505 となるべき表頁 (fol. VVi) の頁付数字が 506 で、その裏頁も 506 となっている。なお、この乱丁頁の上部欄外ハシラ < Lucullus > の少し上に、黒インクで小さく < vide supra > という書き込みがあって乱丁を指摘している。鉛筆書きではないところから、書き込みは 17 世紀前半以前の旧蔵者・読者によってなされたものと思われる。

次には出ていない Otho の項も、p.1066～1075 に本文最後の項目として(こちらは乱丁を免れて)収載されている。

p. 1076: この1頁は、Xylander による Galba, Otho の項への注釈であり、ここで『列伝』(登場人物総計 48 名)の本文は終わる。

#### VII - 3 - 6) 『列伝』本文のあと、巻末まで:

ページ付、フォリオ付ともに新しくなる。p. [1] (= fol. ai.) 以下 p.94 まで左右 2 欄組。

p. [1]: 標題紙: IN VITAS PLVTARCHI PARALLELAS ANNOTATIONES.

p. 2: Xylander から読者への序文。

p. 3～64: 『列伝』の各人物についての、Xylander と Crusenius による注釈。

p. 64～66: De Mensibus Atticis Guil. Xylandri appendix.

p. 66～94: Henrici Stephani Annotationes in suam editionem vitarum Plutarchi.

p. 95～114: In Plutarchi Chæronensis Parallela Variæ lectiones, e codice cum Vulcobiano.

Tum aliis, sed anonymis excerptae: et hac quidem litera A, illa vero V, designatae.

(3 欄組)

fol. Ai オモテ [= p. 115]～fol. Ciii ウラ [= p. 30]: In Plutarchi Vitas comparatas Index. (4 欄組)

fol. Ciii ウラ: FINIS. < MVSEVM| BRITAN|NICVM > スタンプ。第 1 巻の終。

その見返し紙(ブランク)の裏に、Wechel のプリンターズ・マーク。

この『列伝』への注釈の中で、p.1 から Xylander による「アッティカの暦」(～p.66)までは上述した Steph.1572 年版第 13 巻 *Appendix* 中の「仮に第 2 部」とした部分の再録。Stephanus による『列伝』注釈も同じく「仮に第 3 部」とした部分に収められていたものを、当該箇所を表示などは当然この本に合わせて変えてあるが、内容面では(最初の 1 頁分を比べてみたところでは)そのままに再録している。次の「異読」は『列伝』古写本の異読を Vulcob とその他(の協力者たち)が取出したもので各担当者を V[ulcob] あるいは A[lius/lii] で示している。

#### VII - 4) Shelf mark: 1487. y. 4 : 第 2 巻『モラリア』

装訂、外寸等の外観は第 1 巻と同じ。

VII - 4 - 1) 標題紙(図 16): 見返し紙 1 葉のあとに、第 1 巻と同形式の標題紙がある。

PLVTARCHI| CHÆRONENSIS| OMNIVM. QVÆ EX|stant, operum |TOMVS SECVNDVS, |  
*CONTINENS MORALIA*, Gulielmo Xylandro | interprete.

ここで、以前の諸版(本学蔵本および今回 BL で閲覧した Ald. 版)では『Opuscula/小品集』であった題名が『Moralia/モラリア(倫理論集)』となったこと、ラテン語訳者は Xylander であることが明確に示される。

標題紙の裏には <MVSEVM | BRITAN|NICVM> の黒色スタンプ。

fol.2 r - 3r : Xylander < philosophiae publicus in Academia Heidelbergensi professor > から、バヴァリア太公 Ludwig に宛てた < Eidibus Sextil, anno M.D.LXX > 1570 年 8 月 13 日付献辞。

#### VII - 4 - 2) 第 2 巻の目次 : (図 18)

fol. 3v - 4r : Praefatio Xylandri, Pridie Idus Sextil. 1572. Heidelberga. (Xylander による 1572 年 8 月 12 日付の序文) について、

fol. 4r. Catalogus Eorum, Quæ Tomo Posteriore per Plutarchum .. [後略]。章番号 (1 ~ 77) と頁付とを明示した目次。裏頁は本文中に引用された作家の一覧 :

f. 4v : Authorum quorum Plutarchus Testimonia citat in hoc Moraliu opere, catalogus.

#### VII - 4 - 3) 第 2 巻『モラリア』本文

p.1 (= fol. ai) ~ p. 1147: 第 1 巻と同様の gr-lat. 対訳形式。Xylander のラテン語対訳は、Steph.1572 年版の Tom.7 ~ 9 (*Opuscula*) のラテン語訳を引き継ぐ。

p.1147 : 本文 FINIS. (p.1148 ブランク)。

ここに収載されたのは 77 章で、Steph.1572 年版と大きく異なるのは、二人のローマ皇帝 Galba, Otho の章が第 1 巻のほうに (不規則な形で) 入っていて (cf. 本稿 VII - 3 - 5) 『モラリア』には無いこと。それ以外の相違点は、「肉食について」のように 1 章 2 項目でまとめられていたものを 2 章に分ける、あるいは逆に「ティマイオス」関係の 2 章立てを 1 章にまとめるなど、章立て関係 4 カ所の違いだけであり、章の配列順序も、Steph.1572 年版は先行の Ald.1509 年版とは大きく異なったが、この 1599 年版は、Steph. 版をそのまま引き継いでいる。

#### VII - 4 - 4) 次に *Opuscula* への二つの注釈が各々独立した頁付で入る :

p.1 ~ 56 : ラテン語への翻訳者 Xylander による Annotationes (末尾に in *Liber De Herodoti malignitate* も入る)。2 欄組。

p.1 ~ 12: H. Stephanus による Annotationes. 2 欄組。

<In Priorem Plutarchi Libellum seu | Oratiunculam aut Commentariolum, | id est, DE essu carniū, | Annotationes Henr. Stephani. >

この部分が、第 1 巻巻初 (fol.†3) の「内容一覧」の中で「第 2 巻 I. 本文」に続く II. として : <II. Henrici Stephani viri doctissimi in nonnulla horum opusculorum Philosophicorum Plutarchi commentationes doctissimae. > と予告された部分である。この「肉食について」の論考が、本稿 (Steph. 1572, Tom.13 *Appendix* の項 (VI-5) で上述した、Irigoin の見た「Stephanus による、p.1 ~ 235 を占める『モラリア』関連の注釈」の中の一節 (こちらは p.1 ~ 12 であるから) に当たるのであろうか。

#### VII - 4 - 5) 「異読」

p.13 ~ 78: *Opuscula* の *Variae lectiones* (異読) 3欄組。

第1巻巻初 (fol.†3r) の「内容一覧」において < III. *Lectiones variae è codicum Vulcobii, Turnebi, Aldini, Basiliensis, & quadam ex parte Petauii (illud enim absolutum non fuit) partim impressorum, partim manuscriptorum collatione minimè oscitanti collectae.* > と予告された部分。前項 H. Stephanus の注釈に続く章として p.13 から始まっている。協力した学者たちや<sup>51</sup> アルドゥス版、バーゼル版など先行諸版から、印刷されたものあるいは手稿の形で、熱心に(文字通りには「あくびをするなどとは程遠い状態で」)集められた異読、とある。

p. 78 ~ 80: *Erratorum Correctio* 正誤表。第1巻の「内容一覧」では予告されていなかったもの。

#### VII - 4 - 6) Index: p.80 のあとはフォリオ付のみで巻末まで「索引」:

< In Plutarchi Scripta seu Opuscula quae vulgo *Moralia* vocatur Index copiosissimus. > 1頁に4欄組で実質17頁にわたる、題名通り内容が「超豊富な総索引」。第1巻の「内容一覧」の IV. として < Index rerum & verborum maximè notabilium copiosissimus. > と予告されていたもの。この巻末では、Plut. のこの巻に収録された作品の総称として『小品集』と並んで「一般には『モラリア』と称される」というコメントが入っているのも興味深い。Index の最終頁 < FINIS > のあと、末尾部分に *Vitae, Moralia* 両方の巻について、複雑な折丁構成の記述(図13)があって、この重厚壮麗な1599年版プルタルコス全集2巻が終わる。

なお、この1599年版 Plut. 全集の刊行年から振り返れば、対訳や注釈に大きな功績を残した H. Crusierius (1510?~71/75?) と G. Xylander (1532~76) がこの世を去ってからすでに20年以上経っており、H. Stephanus (1528/32~98) も、前年にジュネーヴから故国フランスへ一人旅をしたがその途中で病が悪化して、1598年3月初旬にリヨンの施療院で亡くなっている<sup>52</sup>。

テキスト本文の比較検討は試みることもできなかったが、今回のような概略の閲覧からでも、フランクフルトで「Wechelの後継者たち」が刊行したこの1599年版が、実質的に非常に多くを Stephanus 1572年版全集に負っていることは理解できる。ただ、引用のさいの呼称としてこの1599年版を「Stephanus1572年版の第二版/再版」とすることには、この本の刊記には Stephanus の名が記されていないので混乱をまねくのではないかと、いささかのためらいが残る。印行者の名としての「A. Wechelの後継者たち」または「C. Marnius & I. Aubrius」が適さないのであれば、

51 彼らの関与については、関連文献もふくめて Irigoien, *op. cit.*, p. ccxcvi sq. とくに注参照。

52 A. Renouard, *Annales de l'imprimerie des Estienne, ou Histoire de la famille des Estienne et de ses éditions*, Genève 1971 (repr. of 1843, Paris), p.438 - 439. Xylander と Plut. の翻訳およびその関連事項については、R. Pfeiffer, *History of Classical Scholarship 1300- 1850*, Oxford 1976, repr. 1978, p.113, 140~141; Irigoien, *op.cit.*, p. ccxcvii sq. : « La traduction d'Amyot. » などを参照した。

Teubner 叢書の K. Ziegler, *Plut. Vitæ Poralleleæ*, L-1 (1970) p.xxii にならって「Frankfurt 1599 年版」とすればよいのではないかと考えている<sup>53</sup>。

この Frankfurt 1599 年版は、1620 年に同地で再版され、さらに 1624 年にパリで、H. Stephanus の孫にあたる Antoine Estienne によって、いずれも 2 巻本で再版された。

BL のオンライン・カタログでは

前者は (UK) MP1.0003/27176.1

後者は (UK) MP1.0003/27176.2 となっているが筆者未見である。

以上、準備不足のうえに短時間で心残りの多い閲覧であったが、それでも、Aldus 版では 1509 年の『*Opuscula*／小品集』初版本と 1519 年『列伝』を、Stephanus 1572 年版ではとくに第 13 巻『*Appendix*』を、見ることができ、そして 1599 年版プルタルコス全集（第 1 巻『*Vitæ Paralleleæ*／列伝』と第 2 巻『*Moralia*／モラリア』）も見ることができた。この 1599 年版は「16 世紀の総決算」である、とどこかで読んだ気がするが、今正確な記憶がない。この版の『モラリア』の頁付と大文字 (A～F) による 10 行ごとの区切り表示および各章（各作品）の番号付（1～77）は、近現代の校訂版ひいては翻訳書にも使われている。16 世紀のヴェネツィア、ジュネーヴ、フランクフルトの工房で、AD 1～2 世紀の作者プルタルコスの作品（ラテン語対訳つき）の出版という仕事にかかわった人々の、驚嘆すべきエネルギー（しかもかれらはこの仕事だけをしていたわけではなかった）に思いをはせることができたのは幸いであった。

(AM2H20240107)

---

53 手元の *LSJ-Lexicon, Revised Supplement*, Oxf. 1996, p. xviii : Authors and Works. Plutarchus の項でも、*Moralia* については (Stephanus' edition 1599) と指示されている。

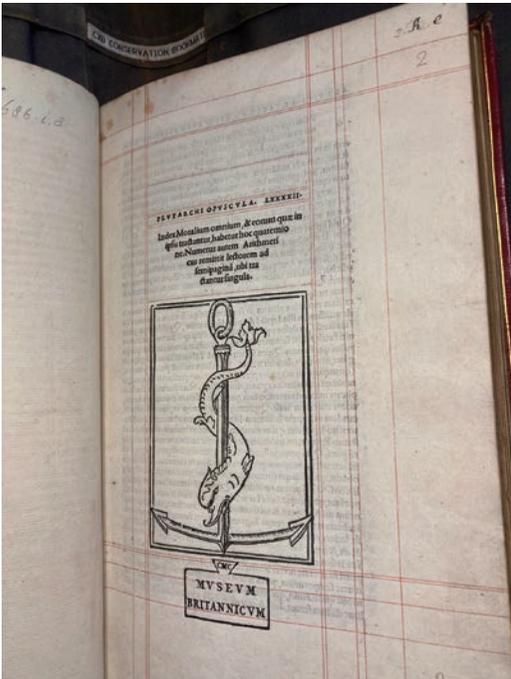


図1：British Library 蔵本(686.i.3)：Aldus1509年版『小品集』標題紙。本稿Ⅳ。

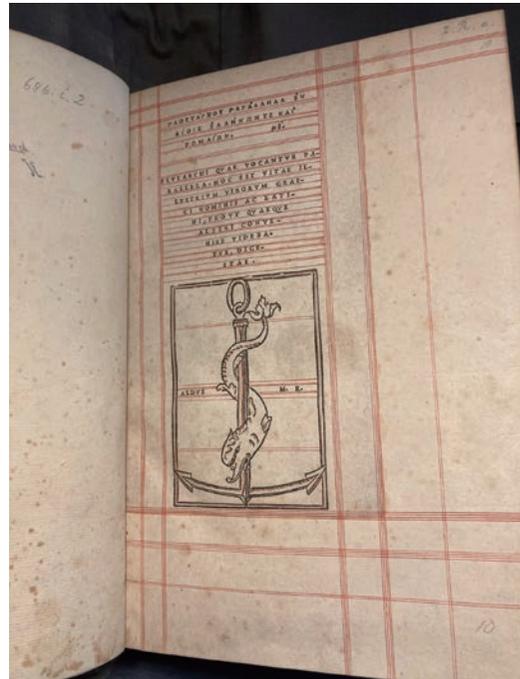


図2：British Library 蔵本(686.i.2)：Aldus 1519年版『列伝』標題紙。本稿Ⅴ。

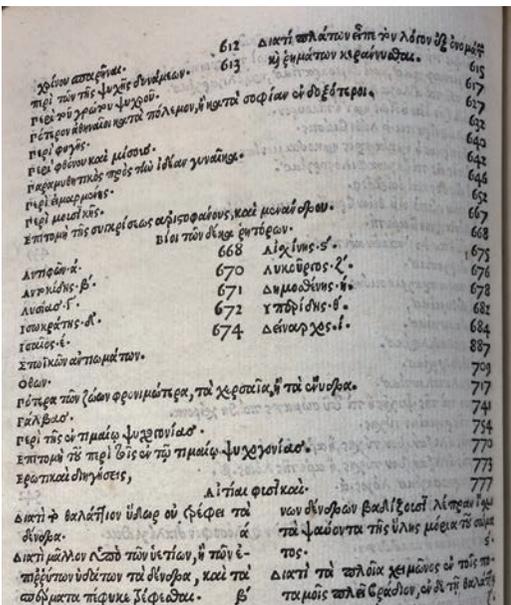


図3：British Library 蔵本(686.i.3)：Aldus 1509年版『小品集』fol. +6v：「目次」。右端数字列の中程<887>は原書目次の誤植。原書本文の当該頁付は<687>。本稿ⅢおよびⅣ。

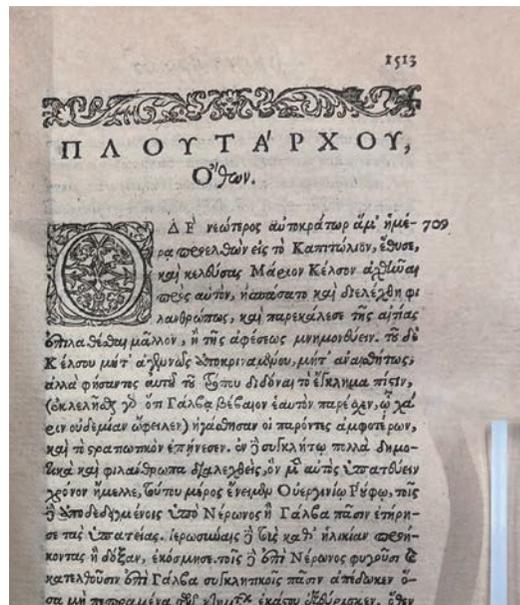


図4：成蹊大学図書館蔵本(880/P75/3)：Stephanus 1572年版『小品集』p.1513。欄外数字<709>は図3(Ald.1509年版)の中の<709>の頁付数字<709>を入れたもの。本稿Ⅲ、Ⅳおよび「目録4」p.105-107。

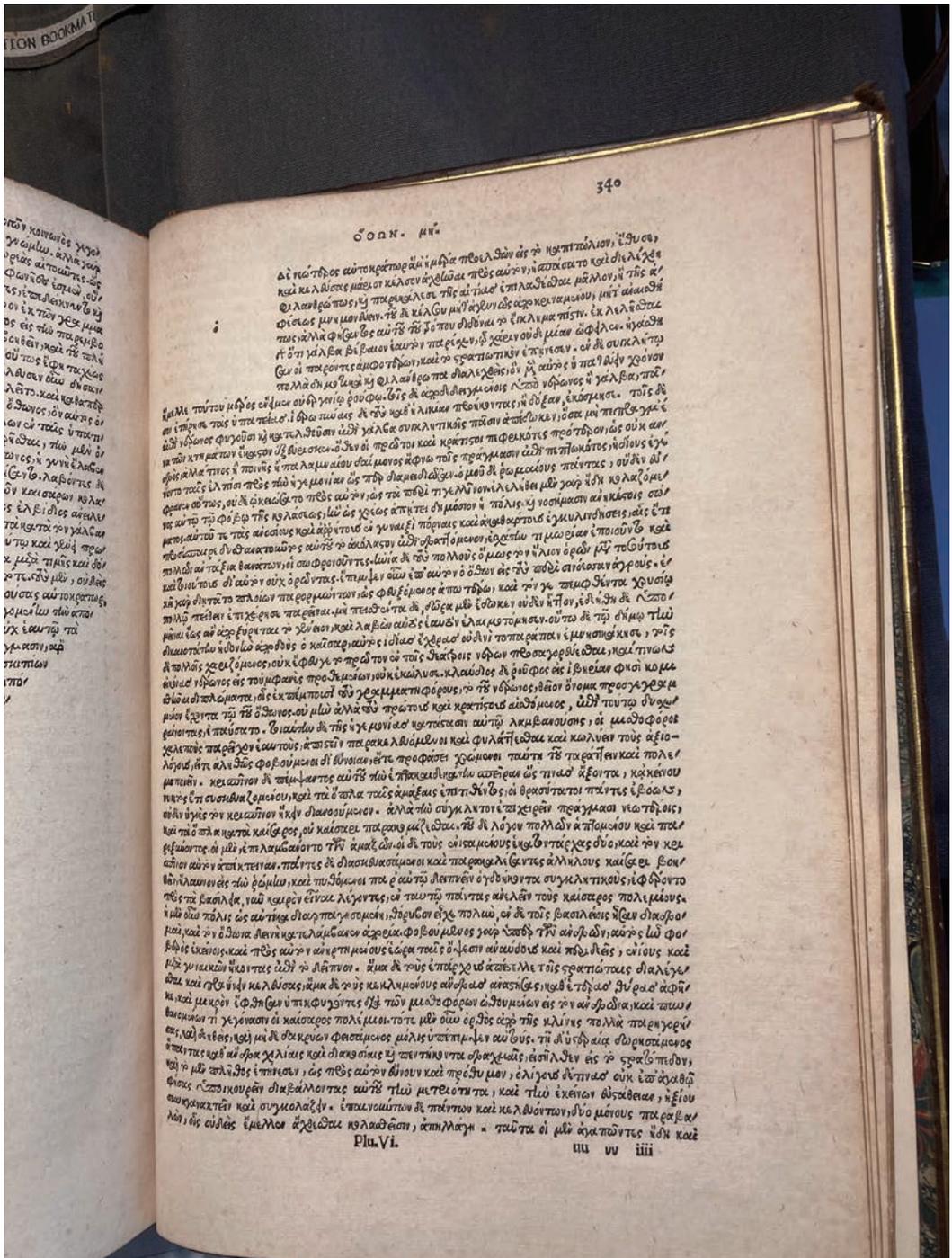


図5：British Library 蔵本 (686.i.2) Aldus 1519年版『列伝』では、折丁記号は頁の右下隅にあり、算用数字による頁付は表頁のみにある。その1例：[第48章] Otho冒頭の頁、折丁記号 (fol. uu uu 4) と頁付 (340)。本稿V-1.

ΒΙΩΝ ΤΩΝ ΕΦΕΞΗΣ ΠΕΡΙΕ- ΧΟΜΕΝΩΝ ΣΧΕΣΙΣ.	
Θησδῆς	1
Ραμίλλος	6
Λυκούργος	13
Νουμάς	19
Σούλων	25
Ροπολικόλασ	31
Θεμιστοκλῆς	38
Κάμυλλος	41
Γερικλῆς	48
Φάβιος Μάξιμος	52
Άλκιβιάδης	61
Μαρκίος Γάιος	69
Τιμολέων	75
Λίμνιος Πούλος	82
Περσώσιδης	89
Μαρκέλλος	95
Άρσειδῆς	102
Κάτων	107
Φιλοποίμω	119
Τίτος Φλαμίνιος	123
Γύργος	127
Μάριος	135
Λύθνοβος	144
Σύλλασ	149
Κίμων	158
Λουκουλλος	162
Νικίασ	172
Κράσις	178
Εύμοχῆς	186
Σερπίλιος	191
* Άγισίλλος	196
Ρομπύιος	205
Άλέξανδρος	218
Κάισαρ	231
Φακίων	242
Μαρκος Κάτων	248
Άγισ καὶ Κλεομένης	254
Τιβέριος καὶ Γάιος Γράκχοι	265
Δημοσθένης	270
Κικέρων	275
Δημητρεος	283
Άντώνιος	292
Άρτοξέρξης	305
Δίων	310
Βραύτος	318
Άρκατος	327
Γαλβασ	335
Όζων	340
* Εὐαγόρασ	345

Αὐτοὶ πάντες  
 πρὸς ἑαυτοὺς  
 ἀφ' ἑαυτῶν  
 αὐτῶν γράμματα  
 εἶπε πρὸς τὸν ἑαυτῶν

図6 : British Library 蔵本 (686.i.2) Aldus 1519年版『列伝』目次。本稿V-2および「目録4」p.108。また「目録4」図版2の欄外数字 < 218 > が、この図6 : Alexandrosの頁付であることも分かる。

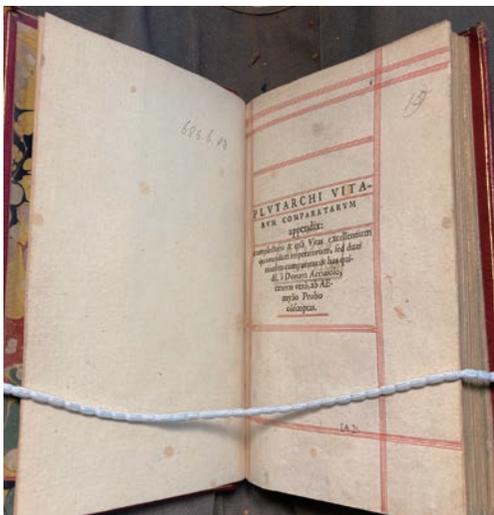


図7: British Library 蔵本 (686.b.13) Stephanus 1572年版『全集』第13巻 p.1: 標題紙『列伝・付録』。本稿VI-1.

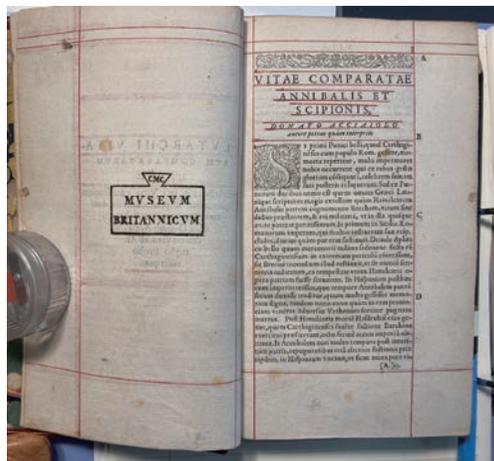


図8: British Library 蔵本 (686.b.13) p.3: 「D.Acciaiolus 作・ハンニバルとスキピオの比較伝記」冒頭。本稿VI-2.

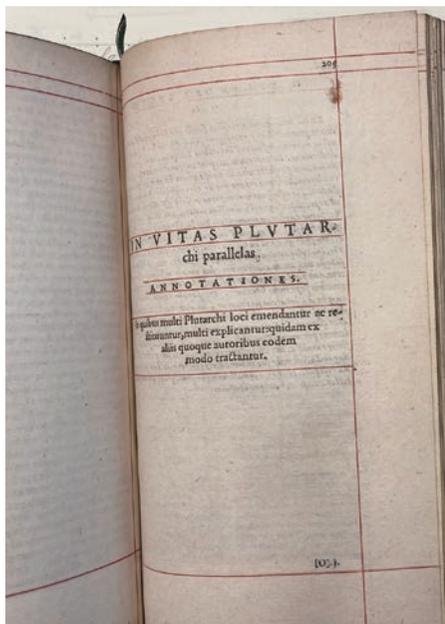


図9: British Library 蔵本 (686.b.13) p.205: 『『列伝』・注釈』標題紙。本稿VI-3.

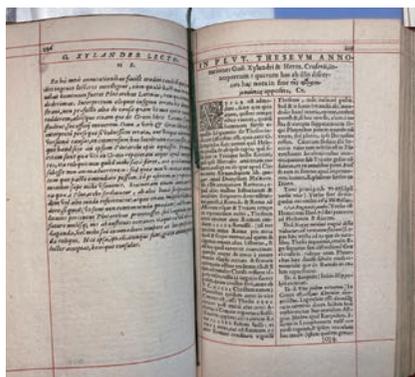


図10: British Library 蔵本 (686.b.13) p.206: Xylanderの序文。p.207: 『列伝』最初の項目 Theseus への注釈冒頭。本稿VI-3.

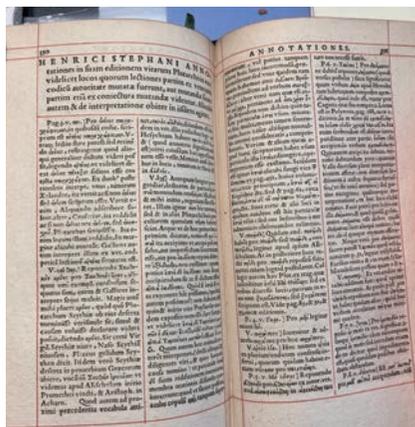


図11: British Library 蔵本 (686.b.13) p.390-391. 『全集』の編集印行者 Henricus Stephanus による『列伝』への注釈。本稿VI-4.

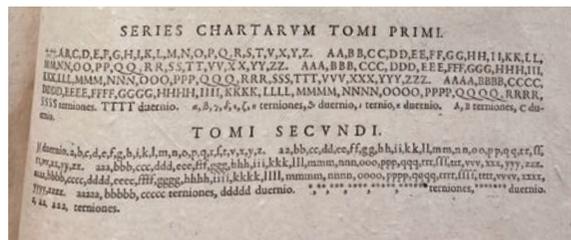
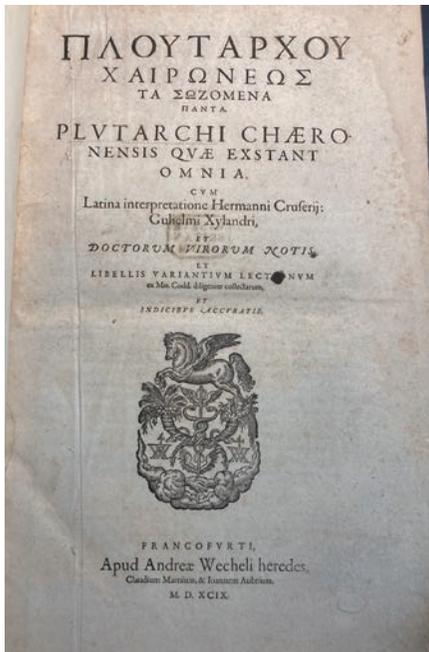


図12: British Library 蔵本 (1487.y.4) Frankfurt 1599 年版『Plutarchus 全集』第1巻巻初にある、第1第2両巻のための標題紙。本稿VII, VII-1.

図13: British Library 蔵本 (1487.y.4) Frankfurt 1599 年版『Plutarchus 全集』第2巻巻末にある、第1第2両巻の折丁表。本稿VII-2, VII-4-6.

CATALOGVS EORVM, QVÆ  
TOMO PRIORE PER PLVTARCHVM TRACTATA CONTI-  
nentur, specialis: additos habens numeros, qui paginas, ubi unumquodq; singulatim  
querendum sit, ostendunt.

1 Θεσπίς, Thespis	pag. 1	17 Ἀριστίδης, Aristides	318	33 Ἀλέξανδρος, Alexander	664
2 Ρωμύλος, Romulus	17	18 Μάρκος Κάτων, Marcus Cato	336	34 Γάιος Κάσσιος, C. Julius Cæsar	707
3 Λυκούργος, Lycurgus	39	19 Φιλοπόμενος, Philopomen	356	35 Φωκίων, Phocion	739
4 Νικίας, Nicias	59	20 Φλαμίνιος, Flaminius	369	36 Κάτων ὁ νεώτερος, Cato minor	759
5 Σόλων, Solon	78	21 Πύρρος, Pyrrhus	383	37 Ἄγριος καὶ Κλεομένης, Agis & Cleomenes	795
6 Πόπλιος, Poplicola	97	22 Γάιος Μάριος, Caius Marius	406	38 Τιβέριος ὁ Γάιος Γράκχιος, Tiberius & Caius Gracchi	824
7 Θεμιστοκλῆς, Themistocles	111	23 Λύσανδρος, Lyfander	433	39 Δημοσθένης, Demosthenes	846
8 Κάμιλλος, Camillus	129	24 Σύλλας, Sylla	451	40 Κικέρων, Cicero	861
9 Περικλῆς, Pericles	153	25 Σίμων, Cimon	478	41 Δημήτριος, Demetrius	888
10 Φάβιος Μέγιστος, Fab. Maximus	174	26 Λυκούλλος, Lucullus	491	42 Ἀντώνιος, Antonius	915
11 Ἀλκιβιάδης, Alcibiades	191	27 Νικίας, Nicias	523	43 Δίων, Dion	958
12 Κοριολάνος, Coriolanus	213	28 Μάρκος Κράσος, Marcus Crassus	543	44 Βρούτος, Brutus	984
13 Τιμόλεων, Timoleon	236	29 Σερρούτιος, Q. Sertorius	568	45 Ἀρτοχέρξης, Artocercus	1011
14 Παῦλος Εὐμήλιος, Paulus. Emilius	255	30 Εὐμήλιος, Eumenes	583	46 Ἀράτος, Aratus	1027
15 Πελοπίδης, Pelopidas	277	31 Ἄγχιλαός, Agefilus	596		
16 Μάρκελλος, M. Marcellus	298	32 Πομπήιος, Pompeius	619		

図14: British Library 蔵本 (1487.y.4) Frankfurt 1599 年版『Plutarchus 全集』第1巻『列伝』の「目次」。章番号 (=登場人物の順番: 1-46) と該当頁を表示。本稿VII-3-2.

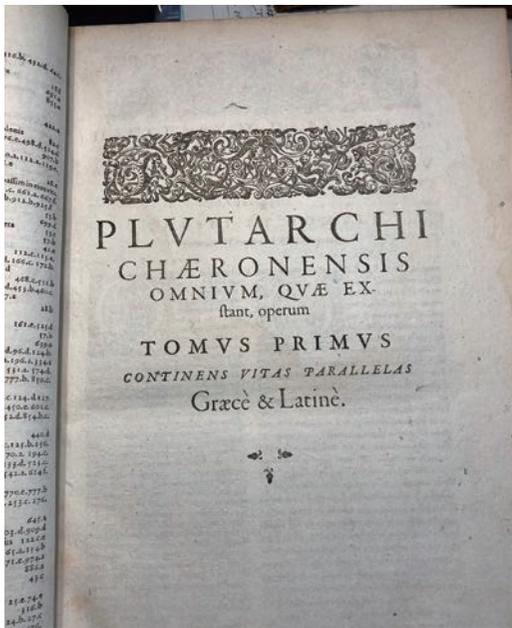


図15：British Library 蔵本 (1487.y.4) Frankfurt 1599 年版『Plutarchus 全集』第1巻本文の標題紙。本稿Ⅶ-3-3.

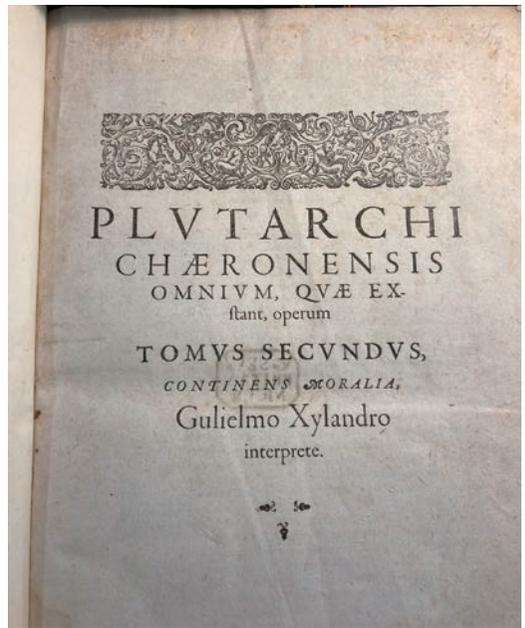


図16：British Library 蔵本 (1487.y.4) Frankfurt 1599 年版『Plutarchus 全集』第2巻本文の標題紙。本稿Ⅶ-4-1.

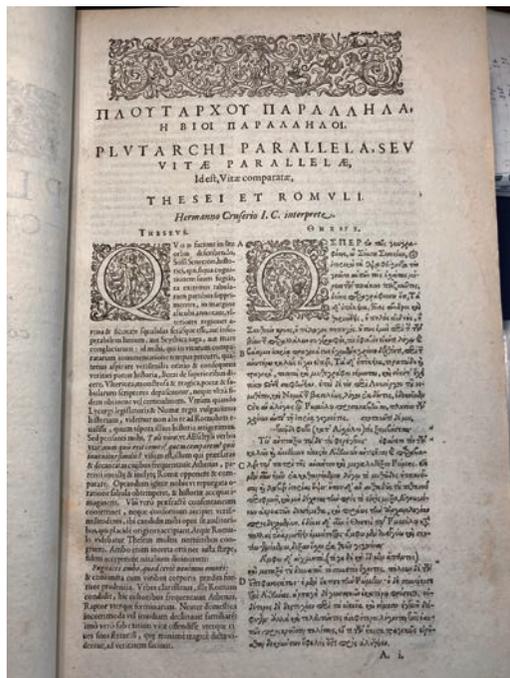


図17：British Library 蔵本 (1487.y.4) Frankfurt 1599 年版『Plutarchus 全集』第1巻『列伝』fol.A.i [= p.1] < Theseus et Romulus > の章冒頭。本稿Ⅶ-3-4.

studium gratias suo loco atque tempore) ad persequendas reliquias horum aliorumque laborum maiore cum animi tranquillitate & alacritate perrexi. Vale.  
*Prudie Janu Sextil. 1572. Heidelberg.*

## CATALOGVS EORVM, QVÆ TOMO POSTERIORE PER PLVTARCHVM tractata continentur, specialis: additos habens numeros, qui paginas, ubi unum- quodque singulatim querendum sit, ostendunt.

1	περὶ παιδείας ἀρετῆς, De liberis educandis.	1	41	περὶ διαυτίαις, De vitioso pudore.	528
2	περὶ δὲ τὸν νῦν ποιημάτων ἀκρίτων, Quomodo adolescens poe- tas audire debeat.	14	42	περὶ φθόνου & μίσους, De inuidia & odio.	536
3	περὶ τῆς ἀκρότης, De auditione.	37	43	περὶ τῆς ἐλευθέρου ἰσχυροῦ ἀντιφθόνου, Qua quis ratione seipsum circa inuidiam laudare possit.	539
4	πῶς ἀπὸ τοῦ φίλου κερταίης ἢ κλέσσης τῶ φίλου, Quomodo possit adu- lator ab amico internocfi.	48	44	περὶ τῶν ὑπὸ τοῦ θεοῦ προσεχθέντων τιμωρημάτων, De his, qui sero à numine puniuntur.	548
5	πῶς ἀπὸ τοῦ ἀδικοῦ ἐλευθέρου ἀντιφθόνου ἐπὶ ἀρετῆς, Quomodo quis suos in virtute paranda sentire possit profectus.	75	45	περὶ ἐμμετρίας, De fato.	568
6	πῶς ἀπὸ τοῦ ἐπὶ τῶν ἐχθρῶν ἀφελείας, De capiendâ ex hostibus vti- litate.	86	46	περὶ τοῦ Σωκράτους διαμονῆς, De Genio Socratis.	575
7	περὶ πανουρίας, De amicorum multitudine.	93	47	περὶ οὐγῆς, De exilio.	599
8	περὶ τύχης, De fortuna.	97	48	Ἐπιμνηστικὸς πρὸς τῶν ἰδίων γυναῖκα, Cōsolatio ad vxorem suam.	608
9	περὶ ἀρετῆς & κακίας, De virtute & vicio.	100	49	Συμποσιακῶν ἀποβλημάτων βιβλία θ', Conuiualium disputa- tionum libri nouem.	612
10	Ἀποθνησκτικὸς πρὸς Ἀπολλωνίου, De cōsolatione ad Apol- lonium.	101	50	Ἐρωτικὸς, Amatorius.	748
11	Υγιεινὰ ἀσθενημάτων, De tuenda sanitate præcepta.	112	51	Ἐρωτικῆς διηγήσεως, Amatoriarum narrationes.	771
12	Ταμιὰ ἀσθενημάτων, Coniugialia præcepta.	138	52	περὶ τῆς, ὅτι μέγιστος τοῖς ἠμετέροις θεῶν φιλοσοφῶν διηγεῖται, Maxi- mè cum principibus viris philofopho esse disputan- dum.	776
13	Ἐπὶ ἑπτὰ σοφῶν συμπόσιον, Septem sapientum conuiuium.	146	53	πρὸς ἡγεμόνα ἀπεβδύσθαι, Ad principem in euditam.	779
14	περὶ δεισιδαιμονίας, De superstitione.	164	54	Εἰ ἀρεθωτέρου πολιτείας, An feni gerèda sit respublica.	783
15	Ἀποθνησκτικὰ βασιλέων & στρατηγῶν, De scitè dictis regum ac imperatorum.	172	55	πολιτικὰ ἀσθενημάτων, Præcepta gerendæ reipublicæ.	798
16	Ἀποθνησκτικὰ Λακωνικὰ, Apophthegmata Laconica.	208	56	περὶ μοναρχίας & δημοκρατίας & ἀντιμοναρχίας, De vnus in repu- blica dominatione, populari statu, & paucorū im- perio.	826
17	τὰ παλαιὰ τῶν Λακωνικῶν ἀποθνησκτικῶν, Instituta Laconi- ca.	236	57	περὶ τῆς μὴ διπλῆς ἀντιφθόνου, De vitando ære alieno.	827
18	Γυναικῶν ἀρετῆς, De mulierum virtutibus.	242	58	Βιητικῶν θεῶν ἰσχυροῦ, De vita decem Rhetorum.	832
19	Κεφαλαίων καθ' ἑκάστην, Quæstiones Romanæ.	263	59	Ἐπιμνηστικὸς συγκρίσεως Ἀλεξάνδρου & Μενάνδρου, Comparatio- nis Aristophanis & Menandri breuiarium.	853
20	Κεφαλαίων καθ' ἑκάστην, Quæstiones Græcæ.	291	60	περὶ τῆς Ἡρόδοτου κακίας, De Herodoti malignitate.	854
21	περὶ ἀσθενημάτων Ἑλληνικῶν & Ῥωμαίων, Hifloriarum Græ- carum cum Romanis coniuncta recensio, Paralle- la.	305	61	περὶ τῶν ἀρετικῶν τοῦ φιλοσόφου βιβλία ε', De placitis Phi- lofophorum libri V.	874
22	περὶ τῆς Ῥωμαίων τύχης, De fortuna Romanorum.	316	62	Διπλαῖ φυσικῆς, Quæstiones naturales.	911
23	περὶ τῆς Ἀλεξάνδρου τύχης ἢ ἀρετῆς, λόγος α', De Alexandri for- tuna vel virtute, oratio prior.	326	63	περὶ τῆς ἐμφανιζομένης ἀσθενοῦς τῶν πνεύματων ἐν σελήνῃ, De facie, quæ in orbe Lunæ apparet.	930
24	περὶ τῆς Ἀλεξάνδρου τύχης ἢ ἀρετῆς, λόγος β', De Alexandri for- tuna vel virtute, oratio posterior.	333	64	περὶ τῆς πρώτης ψυχρῆς, De primo frigido.	945
25	πόσιον Ἀθηνῶν καὶ τῶν ἀπὸ τοῦ ἑσπέρου ἀφελείας ἀντιφθόνου, Bellōne, an pace clariores fuerint Athenienses.	345	65	περὶ τῆς πέπερου ὑδροῦ ἢ τῆς χρησιμότητος, Aqua ne an ignis sit vtilior.	955
26	περὶ Ἰσίδου & Οσφιδος, De Iside & Osfride.	351	66	πόσιον τῶν ζώων τροφικῶν τε καὶ ἑσπερῶν ἢ τῶν ἐπιφθόνου, Terrestria ne an aquatilia animalia sint callidiora.	959
27	περὶ τῆς ἐν τῶν Δελφῶν, De ἐν apud Delphos.	384	67	περὶ τῶν ἀνορθῶν λόγων χρησῶν, Bruta animalia ratione vti.	985
28	περὶ τῆς μὴ χρῆσθαι ἡμετέρας τῶν τῶν Πυθίας, Cur nunc Pythia non reddat oracula carmine.	394	68	περὶ σαρκαφάγας λόγος α', De esu carniū oratio prior.	993
29	περὶ τῶν ἀκλειστῶν χρησῶν, De oraculorū defectu.	409	69	περὶ σαρκαφάγας λόγος β', De carniū esu oratio posterior.	996
30	Ὅτι ἀδεκτὸν ἢ ἀρετῆς, Virtutem doceri posse.	439	70	Ῥητορικὰ ζητήματα, Quæstiones Platonicæ.	999
31	περὶ τῆς ἠδονῆς ἀρετῆς, De virtute moralī.	440	71	περὶ τῆς ἐν Τιμῶν ψυχρῆς, De animæ procreatione, quæ in Timæo Platonis describitur.	1012
32	περὶ ἀσχημονίας, De cohibenda ira.	452	72	περὶ Στωικῶν ἐναντιοπαρουσιῶν, De Stoicorū repugnantis.	1035
33	περὶ ἠσυχίας, De tranquillitate animi.	464	73	Στοικῶν τῶν ἐπὶ ἀσθενοῦς ἐπὶ Στωικῶν τῶν πνεύματων λένου, Com- pendium Commentarii, quo ostenditur Stoicos quàm poetas abliudiora dicere.	1057
34	περὶ φιλαδελφίας, De fraterno amore.	478	74	Ὅτι ἔστι ζωὴ ἐπιφθόνου κατ' Ἐπικουρόν, Ne suauiter quidem vi- ui posse secundum Epicuri decreta.	1086
35	περὶ τῆς ἐν τῶν ἐχθρῶν φιλαδελφίας, De amore prolis.	493	75	πρὸς Κολοτήν, Aduersus Colotem.	1107
36	Ἐπιμνηστικὸς ἢ κακίας πρὸς κακοδαιμονίας, An vitiofitas ad infe- licitatem sufficiat.	498	76	Εἰ καλῶς ἐρηται τὸ, ἀδελφίασιν, An rectè dictum sit, Laten- ter esse viuendum.	1128
37	Ῥόσιον περὶ τῆς ψυχῆς, ἢ περὶ τῶν σωματικῶν πάθησιν, Animæ ne an corporis affectiones sint peiores.	500	77	περὶ μουσικῆς, De Musica.	1131
38	περὶ ἀδελφίας, De garrulitate.	502			
39	περὶ πανουρίας, De curiositate.	515			
40	περὶ φιλοσοφίας, De cupiditate diuitiarum.	523			

図 18: British Library 蔵本 (1487.y.4) Frankfurt 1599 年版『Plutarchus 全集』第 2 巻『モロリア』  
 fol.4 recto, 各章番号を付した「目次」。本稿 VII-4-2, VII-4-3.

(図版はすべて本文内容説明のための印字部分を主とした部分図であり、縮尺率が各々異なっている。AH)